

角 田 3

—新潟県柏崎市 角田遺跡第4次発掘調査報告書—

2017

柏崎市教育委員会

角田 3

—新潟県柏崎市 角田遺跡第4次発掘調査報告書—

2017

柏崎市教育委員会

序

柏崎市の巣地区に所在する角田遺跡の本発掘調査は今回で4度目となります。第1次本発掘調査では、特に鎌倉時代の遺構や遺物が多く見つかり、有力者が住む屋敷があったことが想定されました。第2次と第3次の調査では、古墳時代から平安時代の集落の一部を確認しました。

このたびの第4次本発掘調査では、古墳時代中期と平安時代のムラの一部が見つかりました。その中で、古墳時代中期の竪穴状遺構から、玉作りに関わる資料が出土したことが注目されます。竪穴状の遺構は、玉作りの工房であったのではないかと考えられます。柏崎地域では、古墳時代前期までの玉作りの資料は見つかっていましたが、この時期のものは初めての出土となります。調査範囲が狭いため、玉作りに関わる遺構がどの程度存在したのかはわかつていません。その背景に何があったのか、作られた玉はどのように流通したのかなど、解明できない課題はたくさん残されています。今後の調査の進展に期待を抱かせます。

今回の調査成果をまとめた本書を皆様に活用いただき、地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助としていただければ幸いです。

最後になりましたが、このたびの発掘調査が無事に終了できたことは、ひとえに地域の皆様のご理解とご協力の賜であります。また、ご指導くださった新潟県教育委員会、発掘調査に参加された皆様に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

平成29年6月

柏崎市教育委員会

教育長 本間敏博

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市大字劍字角田地内に所在する角田遺跡の発掘調査記録である。
 - 2 発掘調査は市道柏崎 11・114 号線道路改良舗装工事に伴い、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した。
 - 3 発掘調査における現場作業は、平成 28 年 7 月 27 日に着手し、平成 28 年 10 月 27 日まで実施した。整理作業は、現場作業終了後、本格的に着手し平成 29 年 3 月 10 日まで実施した。本報告書は平成 29 年 6 月に刊行した。
 - 4 発掘調査における現場業務・整理業務は、柏崎市が藤村ヒューム管株式会社 本社営業部 柏崎営業所（以下、藤村ヒューム管）に業務委託して実施した。
 - 5 出土した遺物（木製品を除く）には調査年（西暦下 2 衔）+ 角田遺跡の略記号で、「16 カドタ」と注記し、遺構名・グリッド・層位名等を併記した。
 - 6 本事業で出土した遺物並びに現場作業や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会が保管・管理している。
 - 7 本書の執筆は、中島義人（柏崎市教育委員会）、白井雅明、高橋広太（藤村ヒューム管埋蔵文化財調査部 調査員）があたった。編集は中島が担当した。執筆分担は以下のとおりである。第Ⅱ章は『角田』〔柏崎市教育委員会 1999〕を参考の上、加筆して掲載した。
第Ⅰ章 2、3、4・第Ⅲ章・第Ⅴ章 2、3・第Ⅵ章……………白井雅明（藤村ヒューム管）
第Ⅱ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章 1……………高橋広太（藤村ヒューム管）
上記以外……………中島義人（柏崎市教委）
 - 8 本報告書掲載の図版類の方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約 7 度である。
 - 9 発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略）
- 春日真実 加藤 学 柏崎土地改良区 柏崎市ガス水道局 藤井農家組合 剣町内会

目 次

第Ⅰ章 序 説.....	1
1 調査にいたる経緯.....	1
2 試掘確認調査の経過.....	1
3 発掘調査の経過.....	2
4 調査体制.....	4
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境.....	5
1 遺跡の位置と地理的環境.....	5
2 歴史的環境.....	6
第Ⅲ章 調査の概要.....	8
1 グリッドの設定.....	8
2 基本層序.....	8
第Ⅳ章 遺 構.....	10
1 記述の方法と遺構の分類.....	10
2 遺構の各説.....	11
A 積穴建物.....	11
C 土坑.....	13
E 溝.....	15
G 破壊小溝(崩).....	16
B 掘立柱建物.....	11
D 井戸.....	15
F ピット.....	16
第Ⅴ章 遺 物.....	17
1 遺物の概要.....	17
2 遺物の各説.....	17
A 土器.....	17
C 木製品.....	18
B 石器・石製品.....	18

第VI章 まとめ	19
1 遺構の変遷	19
A 遺構主軸の傾向	19
B 遺構の変遷と時期	19
2 白玉の製作について	21
A 製作工程の復元	21
B 近隣地域での検出例と比較	22
引用・参考文献	23
《別 表》	25
掘立柱建物 (SB) 観察表	25
構 (SD) 観察表	27
島状溝 (SD) 観察表	27
堅穴建物 (SI) 観察表	28
土坑 (SK) 観察表	28
井戸 (SE) 観察表	28
ピット (P) 観察表	28
土器・陶磁器観察表	33
石器・石製品観察表	34
木製品観察表	34

挿図目次

第1図 角田遺跡発掘調査位置と市道柏崎11-114号	
線道路法線	2
第2図 柏崎平野の地形分類と角田遺跡の位置	5
第3図 周辺の古墳時代・古代の遺跡	7
第4図 グリッド設定図と基本層序柱状図	9
第5図 遺構の形態分類図	10
第6図 角田遺跡時期別遺構分布図	20
第7図 角田遺跡堅穴建物 (SI100) における	
白玉製作工程	21

図版目次

[図面]

- 図版 1 角田遺跡 位置図
- 図版 2 調査区全体図
- 図版 3 調査区分割図 1
- 図版 4 調査区分割図 2
- 図版 5 調査区分割図 3
- 図版 6 調査区分割図 4
- 図版 7 遺構個別図 1 積穴建物
- 図版 8 遺構個別図 2 振立柱建物 (1)
- 図版 9 遺構個別図 3 振立柱建物 (2)
- 図版 10 遺構個別図 4 振立柱建物 (3)
- 図版 11 遺構個別図 5 振立柱建物 (4)
- 図版 12 遺構個別図 6 振立柱建物 (5)
- 図版 13 遺構個別図 7 土坑・井戸・ピット
- 図版 14 出土遺物 1 土器 (1)
- 図版 15 出土遺物 2 土器 (2)・石器 (1)
- 図版 16 出土遺物 3 石器 (2)・木製品
- 〔写 真〕
- 図版 17 調査区 1
a. 遺跡近景 b. 調査区全景
- 図版 18 調査区 2
a. 遺跡近景 b. A1~A2 グリッド完掘
c. A4~B8 グリッド完掘
d. A1 基本層序① e. B7 基本層序⑤
- 図版 19 遺構 1 積穴建物
a. SI100 完掘 b. SI100 断面
c. SI100-土坑 遺物出土状況
d. SI100-土坑断面 e. SI100-土坑断面
- 図版 20 遺構 2 振立柱建物 (1)
a. SB001 完掘 b. SB001-P14 断面
c. SB001-P18 断面 d. SB002 完掘
e. SB002-P20 断面 f. SB002-P40 断面
g. SB003 完掘 h. SB003-P114 断面
i. SB003-P224 断面
- 図版 21 遺構 3 振立柱建物 (2)
a. SB004 完掘 b. SB004-P152 断面
c. SB004-P203 断面 d. SB005 完掘
- e. SB005-P131 断面
f. SB005-P207 断面 g. SB006 完掘
h. SB006-P135 断面 i. SB006-P194 断面
- 図版 22 遺構 4 振立柱建物 (3)
a. SB007 完掘 b. SB007-P250 断面
c. SB007-P258 断面 d. SB008 完掘
e. SB008-P15 断面 f. SB008-P25 断面
g. SB009 完掘 h. SB009-P98 断面
i. SB010 完掘
- 図版 23 遺構 5 土坑 (1), ピット
a. P210 断面 b. P210 土器器出土状況
c. P210 完掘 d. SK5A-A'断面
e. SK5B-B'断面 f. SK5 遺物出土状況
g. SK5 遺物出土状況 h. SK5 完掘
- 図版 24 遺構 6 土坑 (2)
a. SK3 断面 b. SK3 完掘
c. SK4 断面 d. SK4 完掘
e. SK35 断面 f. SK35 完掘
g. SK53 断面 h. SK53 完掘
i. SK55 断面 j. SK270 断面
k. SK270 完掘 l. SE280 断面
m. SE280 完掘
- 図版 25 遺構 7 槽, 杖状小溝群
a. SD1 A-A'断面 b. SD1 B-B'断面
c. SD1 完掘 d. SD2 完掘
e. SD2 完掘 f. SD6,7,8 断面
g. SD6,7,8 完掘 h. SD9 完掘
i. SD9 完掘 j. SD202 断面
k. SD80 断面, 基本層序
l. SD79 断面 m. SD81 断面
n. SD92 断面 o. SD77~85 完掘
p. SD83~89 完掘 q. SD89~93 完掘
r. SD94~97 完掘
- 図版 26 出土遺物 1 土器 (1)
- 図版 27 出土遺物 2 土器 (2)
- 図版 28 出土遺物 3 石器・木製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査にいたる経緯

角田遺跡は、昭和58年に新潟県教育委員会が分布調査を実施した際に発見された。遺跡は、猪石川と別山川に挟まれた合流地点の自然堤防上の畠地を中心に広がると想定され、周知化された。その後、柏崎市教育委員会では5次の確認調査と、3次の本発掘調査を実施し、少しづつ遺跡の状況が明らかとなってきた。

第1次確認調査は、遺跡範囲の東側で宅地造成が計画されたことに伴い平成9年度に行った。その結果、多くの遺構と古墳時代から江戸時代の遺物が出土し、遺跡範囲が東側に広がることがわかった〔柏崎市教委1998〕。翌平成10年度に、第1次本発掘調査を一部で実施し、鎌倉時代を中心とした時期の遺構が多数出土した〔柏崎市教委1999〕。

第2次確認調査は、河川改修事業及び市道建設に伴って平成13年度に行った。この調査では、遺構・遺物は出土せず、旧河道の痕跡を確認した〔柏崎市教委2002〕。

第3次・第4次確認調査は、第1次本発掘調査区域周辺で公共下水道敷設工事に先立って行った。広範囲にトレーナーを設定した中で遺跡範囲が絞りこまれ、平成14年度から平成15年度にかけて、第2次・第3次本発掘調査を行った〔柏崎市教委2006〕。

第5次確認調査は、本報告に伴うものである。角田遺跡の南西部で、市道柏崎11-114号線道路改良舗装工事が計画された。これは、角田遺跡周辺の住宅街を抜ける市道を拡幅するもので、地域からの要望が特に強い事業であった。計画では、延長328mにおいて未舗装の現道を幅6mに拡幅して舗装を行うこととなっている。事業を担当する柏崎市都市整備部とは、平成21年度から協議を開始した。平成22年度には計画が具体化し、平成23年の用地買収後に確認調査を実施することになった。協議の結果を受けて、事業主体者である柏崎市は平成23年4月1日付け都第2号で文化財保護法第94条第1項による通知を新潟県教育長へ提出した。この段階で、工事範囲における遺跡の状況は把握できていなかったため、新潟県教育長から確認調査を実施するよう柏崎市教委へ通知がなされた。柏崎市教育委員会は、平成24年3月23日付け教總第611号で文化財保護法第99条に基づく報告を新潟県教育長へ行い、確認調査に着手した。

2 試掘確認調査の経緯

原因事業に関する試掘・確認調査は平成23年度に実施している。各調査の期間や関連文書は、〔柏崎市の遺跡22〕〔柏崎市2013a〕に記載されているが、以下にその概要を述べる。

第5次確認調査に至る経緯 第5次確認調査の原因となった事業は、柏崎市（都市整備部 都市整備課）が事業主体の市道柏崎11-114号線道路改良舗装工事である。工事は延長328mについて、未舗装の現道を幅6m（本道幅4m）に拡幅して整備するものである。側溝や法面を含めると、幅2~6mが新たな道路用地となり、施工区間の一部が角田遺跡の推定範囲に含まれていた。この事業に関わる協議は、平成21年から開始し平成22、23年まで継続して行われた。平成24年3月、用地買収が一定範囲なされた区域、②・③地区を対象に第5次確認調査を行った（第1図）。

確認調査の概要 遺跡範囲の広がり確認と、積算資料を作成するために、4地区に分割して行った。この分割のうち、①・④地区は買収地と未買収地が交互に入り組んでいるため、調査を行っていない。本発掘調査の結果から判断するか、確認調査を再度行う必要がある。

②地区：TP-1ではヨシやアシの根痕と思われる黒色土が夥しく、遺構確認は困難ながら土坑とピットを1基ずつ検出した。TP-2・TP-5では古墳時代中期の土師器小片とピット数基を検出した。

③地区：TP-3は耕地整理により削平をうけており、②地区に比べて50cmほど田面が低いことが確認できた。この影響で遺構・遺物は検出・出土しなかった。TP-4では鯖石川・別山川合流点で見られる一連のシルト層が確認された。これらから③地区は遺跡範囲外とした。

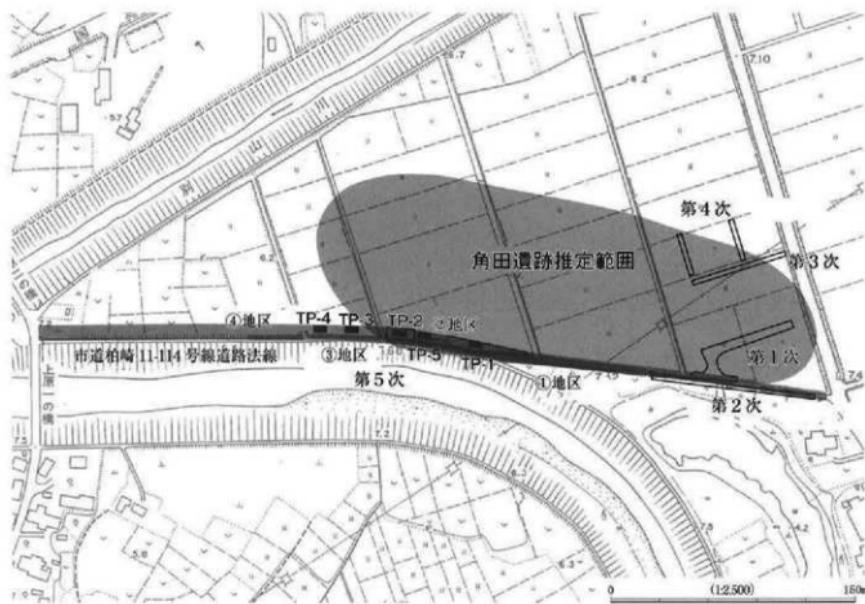
以上の結果、②地区が遺跡範囲となり、本調査が必要と判断された。

3 発掘調査の経過

平成28年度は角田遺跡第4次発掘調査として、本発掘調査を行った。調査は柏崎市が藤村ヒューム管株式会社本社営業部柏崎営業所に業務を委託して実施した。現場作業は平成28年7月27日～10月27日までの延べ63日間であった。調査面積は270m²で、調査区を西半と東半の半分に分けて行った。調査担当を含む調査員は126人、作業員は延べ261.5人を要した。

事前準備 6月30日～7月26日

6月30日、発掘調査業務委託契約を締結し、同日から作業員募集などの事前準備を開始した。7月8日現地打ち合わせを行い、資材搬入路、駐車場敷設位置などを確認した。周囲には新築家屋



第1図 角田遺跡発掘調査位置と市道柏崎 11-114 号線道路法線

5棟と、建築着工予定の家屋3棟が確認できたため、調査に先立って各種保障を含んだ家屋調査を行った。また調査区は住宅街が近接しており、さらに区域が狭小なため、軽量矢板による土留め支保を行い調査することとなった。

表土掘削：7月27日～7月31日、9月1日～9月6日

発掘調査は重機による表土掘削から開始した。重機は法面パケットを装着した0.25m³級のバックホーを用いた。土留め支保を10mおきに施工しながら、表土掘削を行った。A1およびB6～B8付近は、深度1.2mにおいて良好に残存する遺物包含層と、多くの土器片が確認できた。このため相当層の直上で掘削を停止した。A3～B5は、深度1.0mにおいて遺構確認面に相当する灰白色粘土層を検出した。これは近世水田耕作土（Ⅱb層）直下にて見られたことから、水田耕作の影響で遺物包含層が搅拌されたものと判断した。さらに包含する遺物が希薄だったため、遺構検出面まで重機で発掘することとした。なお出土遺物は出土した位置に留めておき、グリッド杭打設後に改めてとり上げを行った。掘削作業は1日間で約70～100m³の進捗であった。また周囲が住宅街であることから安全上の配慮により、適宜調査区の外周を防護柵で囲った。

遺構検出：8月1日～8月4日、9月7日～9月8日

調査区外周に排水用の開渠を掘削し、同時に基本層序の確認を行った。調査中に発生した残土は隨時一輪車を用いて調査区外に集積した。A1およびB6～B8付近は遺物包含層の掘削を行い、同時に遺構検出を進めた。なお、遺構検出は試掘・確認調査によって得られた結果の検出標高より20cm上位で行った。このため遺構密度が試掘・確認調査時より増加している。

遺構発掘・図化 8月5日～8月26日、9月9日～9月30日

柱穴・ピットは、平面形態の長軸方向で区切り半蔵した。原則として南・西側をはじめに発掘して断面の確認・記録を行った。長軸方向で半蔵することにより、柱痕部分や柱掘方部分をより確実にとらえることを意図した。溝は、適宜ベルトを設け、断面の確認・記録を行ながら発掘した。また遺構発掘時、滑石の碎片が出土した堅穴建物の覆土は、土壤洗浄用にサンプリングを行った。雨天により現場作業を中止する折、現場事務所にて覆土のウォーターセバレーションを実施した。

発掘した遺構はすべて、遺構カードに平断面の規模、覆土の特徴などを記載した。主要な遺構は土層断面図や縦横断面図（エレベーション図）・遺物出土状況図などを適宜作成し発掘した。

調査区の基本測量や、遺構の実測は現場作業員により適宜実施した。これらの測量にはトータルステーションと電子平板を用いて行った。

写真撮影：空中写真撮影8月25日、9月30日

現場業務における写真の撮影では、通常の手持ち撮影と、ドローンによる空中写真撮影を行った。手持ち撮影は、カラーリバーサル35mm（フジカラー プロビア100F）と、デジタルカメラ（ニコンD610 2426万画素）を用い、個別遺構の断面・遺物出土状況・完掘状況などを対象に行った。ドローンによる空中写真撮影は、調査区が西半・東半の2か所に分かれたため、都度撮影を行った。なお、この空中写真的データは最終的に1枚に合成した。

整理作業：10月9日～3月8日

作業員は延べ942人を要した。現場作業中、主に雨天を利用して遺物の洗浄・注記・接合・滑石製玉製品の選別といった基礎整理を行った。本格的な整理作業は、現場作業が終了した冬期間に行つた。実測図化は、時期の判別できる遺物が少ないと、遺存状態の良いものは、小片であっても極

力行った。土器・陶磁器のほかに、石器・石製品・木製品を実測した。土層断面図などの現場作業で作成した図面は、遺構平面図とともに整合・編集を行った。現場作業で作成した図面や遺物の実測図はデジタルトレースを行った。その他各種図版の版組、原稿の執筆までの作業を藤村ヒューム管理蔵文化財調査部整理室にて行った。

4 調査体制

発掘調査、整理作業は平成28年度に実施した。平成29年度の業務完了（報告書刊行）に至るまでの調査体制は以下のとおりである。

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 本間敏博

担当 博物館 埋蔵文化財係

総括 猪俣哲夫（教育部長）

田村光一（博物館長）

監理・庶務 多田利行（館長代理兼埋蔵文化財係長）（平成28年度）

小池久明（ ～ ）（平成29年度）

庶務 重住知夏（非常勤職員）

調査担当 中島義人（主査・学芸員）

調査組織 藤村ヒューム管株式会社本社営業部柏崎営業所

発掘調査（平成28年6月30日～10月8日）

代理人 丸山 薫（埋蔵文化財調査部）

調査担当 白井雅明（ ～ ）

調査員 関本郁栄（ ～ ）

発掘作業員 猪爪繁男、春日雅美、片山勝也、高橋広太、中村新平、配野利男、長谷川孝志、

藤巻章、宮川道英、若月誠

整理作業（平成28年10月9日～平成29年3月10日）

調査担当 白井雅明（埋蔵文化財調査部）

補助員 高橋広太（ ～ ）

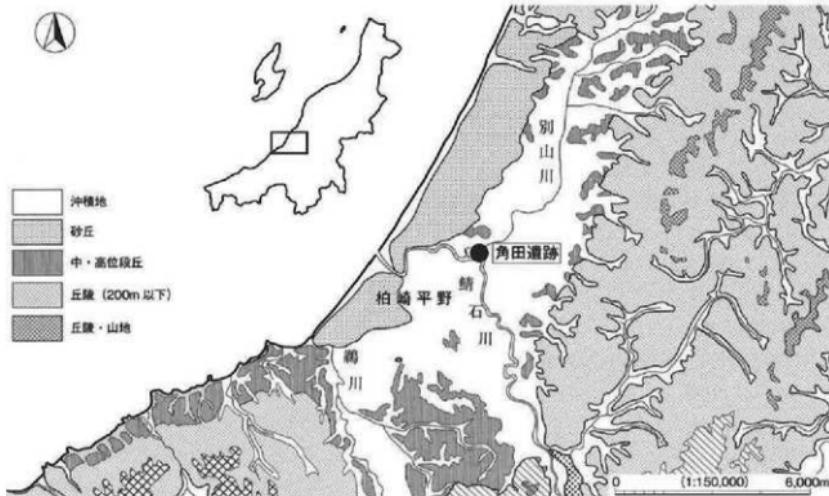
春日雅美（ ～ ）

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置と地理的環境

柏崎平野は、主要河川である鶴川と鯖石川及びその支流の別山川によって形成された幅約7km、長さ約18kmの小規模な臨海沖積平野である（第2図）。その南と東西の三方は「刈羽三山」を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれ、黒姫山山頂付近は大起伏山地に地形区分され、頸城方面との分水嶺をなす。山地・丘陵の縁辺や海岸部には荒浜砂丘が発達し、その後背には湿地性の沖積地が展開する〔鈴木ほか1988・1989〕。こうした柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鶴川・鯖石川によって西部・中央部・東部に三分される。東部は鯖石川以東の地域に相当し、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯と別山川・長鳥川地域の沖積地、さらには日本海沿岸の砂丘が広く展開し、その軸はいずれも北北東-南南西方向を示している。こうした地形的特徴は新第三系以降の地質構造を反映したもので、褶曲構造の向斜・背斜方向と一致している〔鈴木ほか1988・1989、徳間ほか1990〕。

角田遺跡は東部に立地し、鯖石川と別山川の合流地点に位置する。新潟県の河川は上流に地すべり地帯が多く、浸食作用が盛んである。下流近くで河川の流れが緩やかになると天井川が形成されやすくなっている。鯖石川の最上部柏崎面が完成された後も河川の下刻は続き、完成した柏崎面を浸食していった。また、洪水の際の蛇行によって平野部では側方浸食が行われ、中流から下流にかけて柏崎面を破壊し、新たに鯖石川面と呼ばれる冲積面を作り出していった。この鯖石川面は鯖石川流域の幅1kmの狭い範囲にのみ分布する面であるが、この面から鯖石川流域の氾濫原が形成され、両岸の自然堤防にはいくつかの古墳時代、古代、中世の遺跡が立地している。



第2図 柏崎平野の地形分類と角田遺跡の位置

2 歴史的環境

今回実施した角田遺跡第4次発掘調査では、古墳時代～近世の遺物が出土している。中でも主要な古墳時代・古代における周辺地域の歴史的環境を概観していく（第3図）。

古墳時代

柏崎平野では、古墳時代の遺跡はあまり広範な範囲では確認されていない。古墳時代は弥生時代後期の状況を引き継いだ地域的展開がなされたと考えられる。

前期の遺跡は、平野北部の海岸地域における高塙B遺跡（西山町石地）〔西山町1983〕・刈羽村刈羽大平遺跡〔柏崎市1985b〕、別山川流域における坂田遺跡群（西山町坂田）〔柏崎市2010〕・北田遺跡（曾地）〔柏崎市1990〕・行塚遺跡（26）〔柏崎市1985a・同1992〕、鶴川下流域における琵琶島城跡（柏崎農業高等学校庭遺跡／元城町）〔岡本ほか1987〕がある。

古墳は、前方後円墳1基と前方後円墳の可能性を持つ円墳1基で構成される吉井行塚古墳群（27）〔柏崎市1989〕がある。位置的には、玉作集落である行塚遺跡（26）〔柏崎市1985a〕に隣接することから、弥生時代後期以降継続している領域の中で、中枢部的な機能が刈羽村西谷遺跡〔刈羽村1992〕周辺から2kmほど南に移った可能性がある。

しかし、古墳そのものの造営は一時的であり、越後全般の状況と同様にその後に継続されていないことから、地域的な首長の存在はみえなくなる。その一方で、吉井遺跡群の動向をみると、中期集落には、戸口遺跡（23）B地点や礼坊遺跡（25）があり、後期では戸口遺跡A地点や吉井水上II遺跡が営まれるなど、地域内での継続性がうかがわれる〔柏崎市1985a・同1990〕。また、同様に弥生時代後期半において、該当地域の中核を担った西谷遺跡周辺でも、中期に至り刈羽村枯木A遺跡〔刈羽村1995〕や同村山ノ脇遺跡〔刈羽村1998〕が営まれ、さらに後期では畠田遺跡（西山町北野）〔西山町2001〕へと継続している。このような連続性・継続性がうかがわれる地域は、柏崎平野では今のところ限られており、別山川中・下流左岸域の地域的特性とできる。

角田遺跡（1）の周辺では、下境井遺跡（7）・剣下川原遺跡（9）・上原遺跡（10）から古墳時代中期の遺物が出土しており、鯖石川や別山川付近の自然堤防上に立地する点で共通している。

古代

越後国を含む古代北陸道の諸国は、それまでの越国が分割されて成立したが、それは持統4年（690）の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている〔坂井1983〕。成立当初の越後国とは現在の阿賀野川以北の地であり、現柏崎市域等は越中国に属していた。現在のような越後国の国域は、大宝2年（702）に越中国の4郡（蒲原・古志・魚沼・頸城）が越後国へ分割され〔米沢1976〕、和銅5年（712）に出羽国が分置・独立して確定されることとなった。

奈良時代の柏崎市・刈羽村域は、柏崎市西部の旧頸城郡域や魚沼郡域であった旧刈羽郡小国町域（現長岡市）などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡に属していた。当時の古志郡は、長岡市（旧三島郡和島村）八幡林遺跡の調査成果から、島崎川流域の同遺跡付近に郡衙等の中核部が所在したことが想定できる〔和島村1994ほか〕。その後、柏崎平野一帯は9世紀前葉に三嶋郡として分置・独立したとされている〔米沢1980〕。ただし、この地域と柏崎平野とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的な隔たりがみられる。三嶋郡の分郡以前からも分割されて郡務が行われており、郡の大領と少領がそれぞれの地域を専門的に担当していたとする説もある〔相沢1998〕。なお、三嶋郡の中心は箕輪遺跡（枇杷島）付近と考えられる〔新潟県2015〕。出土した木簡などにより、郡衙の施設と

駅家は近接していたと考察される。

三鷲郡内の郷としては、承平年間（931～938）成立の『倭名類聚鈔』に、「三鷲」「高家」「多岐」の3郷が記されている。また、延長5年（927）に完成した『延喜式』には、兵部省の諸国駅伝馬に北陸道の越後国駅馬として「三鷲」と「多太」がある。これら2史料に記された地名や記載順あるいは式内社などの分布からすれば、三鷲駅が三鷲郷に、多太駅は多々神社などがある別山川流域の多岐郷内に推定される。そして、のちの莊園分布などを参考とすれば、鶴川流域に三鷲郷、鯖石川中流域・長島川流域に高家郷、別山川流域に多岐郷をおおまかに想定できる。

柏崎平野における古代の遺跡は、その多くが平安時代の遺跡である。別山川流域の諸遺跡では古墳時代中・後期の遺跡が複合している例があるものの、奈良時代の遺跡は発見例が少ない。奈良時代の遺構・遺物が確認されているのは、箕輪遺跡（枇杷島）、音無瀬遺跡（北条）【柏崎市2012b・同2013b】、戸口遺跡（23）、萱場遺跡（24）【柏崎市1985 a・1990】、刈羽大平遺跡のほか、製鉄遺跡などが知られている程度である。また、平安時代については、全国的な傾向として9世紀中葉～後半に遺跡数が急増するが、角田遺跡（1）をはじめとした、柏崎平野の動向も基本的に同じで、河川流域に発達した自然堤防上などに集落遺跡が展開するようになる。



No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	角田	古墳・古代	9	御下川原	古墳・古代・中世	17	御野	绳文・古墳・中世	23	戸口	弥生・古墳・古代・中世
2	御光湖小学校東	古代	10	上原	古墳・平安・藤倉	18	江ノ下	弥生・古墳・平安・中世	24	萱場	弥生・古墳・古代
3	御光湖小学校A	古代	11	御通橋	绳文・弥生・古代	19	西草薙	平安～近世	25	札場	古墳・平安・中世
4	沙鉢山	平安	12	阪木町	平安	20	様田町	绳文・古墳・平安・室町	26	行塚	古墳・平安・中世
5	西岩野	弥生・中世	13	宝田	古代・中世	21	吉井水上I	古代	27	吉井行塚古墳	古墳
6	宮ノ通	古代・中世	14	山崎	平安・中世	22	吉井水上II	古墳・平安・中世	28	移ノ木田B	古代・中世
7	下境井	古墳・平安	15	田坂山遺跡群	绳文・弥生・中世						
8	下境井西	古代	16	藤井城跡	古代・中世						
凡 例: ●遺跡 罫古墳											

第3図 周辺の古墳時代・古代の遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定

角田遺跡第4次発掘調査は、遺跡推定範囲のうち市道柏崎11-114号線道路改良舗装工事の用地にあたる部分を対象に最大幅約5.0m、最大長約68.8m、面積約270m²の範囲を調査区とした。発掘調査に関わるグリッドは、これまでの延べ3回にわたる調査では、角田遺跡第1次発掘調査【柏崎市1999】にて設定されたものを用いて行われた。しかし今回の調査にあたって、1.調査区が設定された地点と著しく離れること、2.当時設定されたグリッドの東西軸の傾きが大きいこと、3.2007年に発生した中越沖地震の影響でわずかだが座標系に影響があること、以上の3点が考えられ調査・報告において支障となる可能性があった。そのため今回改めて世界測地系に準拠し設定を行った(第4図)。

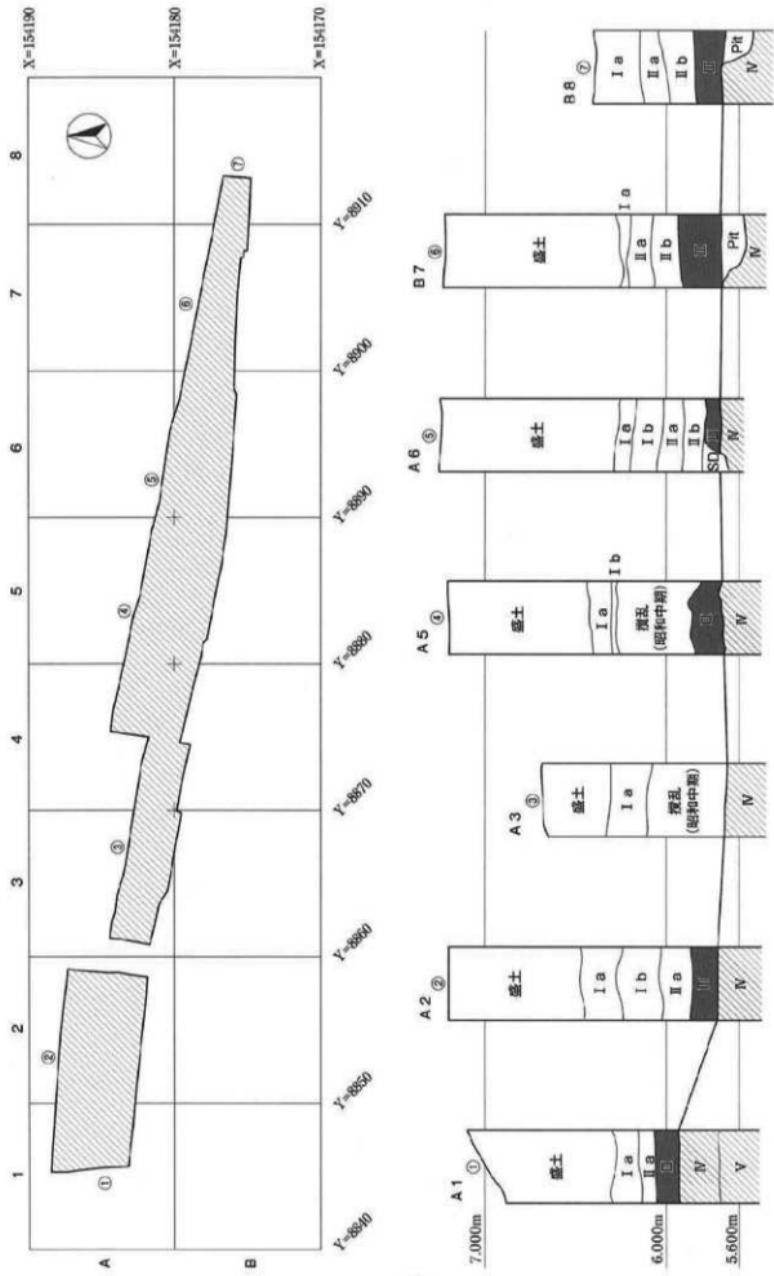
グリッドは大小2種類を用い、大グリッドは10m単位、小グリッドは2m単位を25等分したものである。大グリッドの呼称は北西隅の杭を基準として、南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字とし、両者の組み合わせによって「A4」などのように表示した。小グリッドは1~25の算用数字で表し、北西隅を1、南東隅を25とし、「A4-21」などのように大グリッド表示の後につけて呼称した。今回の調査区にあたる杭の座標値(世界測地系)は、基準杭K1が(X=154182.755、Y=8739.504)、B6杭が(X=154180.000、Y=8890.000)となる。グリッド杭打設の基準となる、基準杭K1、K2の打設は株式会社 桑技術が行った。

2 基本層序

遺跡は鯖石川と別山川が合流する地点の自然堤防に立地し、標高は5.5~5.9m前後である。現況は宅地と水田で、層厚約100cmの宅地盛土を除けばほぼ平坦な地形である。宅地開発前はほぼ全域が水田として利用されていたようである。地形は全体に鯖石川のある南に向けて緩やかに傾斜する。これは本調査の遺構検出面でも同様である。

基本土層はI~IV層に大別したが、調査区の一部においてIV層の直上にII層が堆積したり、III層が堆積していないなどの不安定な堆積状況を確認した(第4図)。これは前述の通り水田耕作によるものと推測できる。

- I a層：青灰色粘土(5B6/1) 粘性やや強い。しまりやや強い。現代の水田耕作土。
- I b層：青灰色粘土(5B4/1) 粘性やや弱い。しまり弱い。現代の水田耕作土。
- II a層：明青灰色粘土(10BG7/1) 粘性やや強い。しまり強い。酸化マンガン粒を多量含む。
近世の水田耕作土。
- II b層：黒褐色粘土(25Y3/1) 粘性やや弱い。しまり弱い。III層との搅拌が強い。近世の水田耕作土。
- III層：黒褐色粘土(25Y3/1) 粘性やや強い。しまり弱い。8mm以下の炭化物を多量含む。
古墳時代中期~古代の遺物包含層。
- IV層：灰白色粘土(N7/0) 粘性強い。しまりやや強い。酸化鉄(根痕)を多量含む。酸化しやすく、空気に触れるとき色調が直ちに黄色がかる。古墳時代中期~古代の遺構確認面。



第4図 クリフ設定期と基本層序注釈図

第IV章 遺構

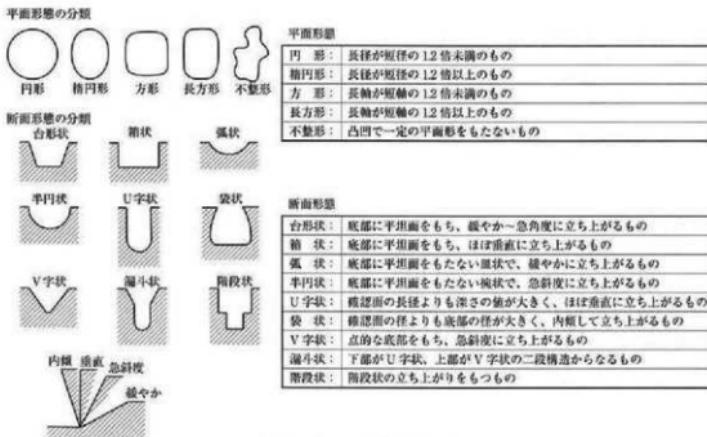
1 記述の方法と遺構の分類

堅穴建物1棟、掘立柱建物5棟、土坑5基、井戸1基、溝11条、ピット240基と、島に関連した畝状小溝【細井2014】と考えられる溝列を検出した。大多数の遺構は、出土遺物や遺構に堆積する覆土から、古墳時代中期（5世紀）および古代（9世紀後半～10世紀前半）の所産と判断できる。畝状小溝は、伴う遺物の解釈が困難なため、詳細な時期は判然としない。しかし古墳時代～古代の遺物包含層を切るように形成されていることから、少なくとも12世紀以降の所産と考えられる。このほか、肥前系磁器の出土した近世の溝（SD1）がある。

遺構は本文・観察表・図面図版・写真図版を用い、主要なものを説明した。本文で記載したものは、図面図版においてすべて個別図を掲載した。溝や畝状小溝などの遺構は断面図のみ遺構配置図・遺構分割図に掲載した。遺構番号はすべて通し番号とし、遺構種別の後ろに番号を付した。なお掘立柱建物は、これとは別に「001番」から番号を付した。遺構種別は略称を用い、堅穴建物「SI」、掘立柱建物「SB」、土坑「SK」、井戸「SE」、溝「SD」、ピット「P」とした。

遺構の平面及び断面形状の表記は、和泉A遺跡【新潟県1999】、青田遺跡【新潟県2000】の分類基準（第5図）に準拠した。平面形の規模は、長軸（最大長・最大径）を計り、直交する方向の最長部を短軸として計測した。深度は遺構検出面からの最深部を計測した。方位は、長軸が北を中心にして東西に傾く方向を表した。

掘立柱建物は、柱間の多い方向を桁行（長軸）、少ない方向を梁行（短軸）とする。方位は、桁行（長軸）を中心として、北を基点に東西に傾く方向を表した。面積は桁行（長軸）×梁行（短軸）で計算した。掘立柱建物と主要遺構の新旧関係は本文中に記述した。



第5図 遺構の形態分類図

2 遺構の各説

A 竪穴建物

SI100 (図版7.19)

B7グリッドに位置する。遺構の南側半分以上は調査区外のため、全容は不明である。地形の傾斜に対して直交するように立地する。遺構検出面から床面までは深さ約20cmだが、上部が後世の開発行為などで削平されていることを鑑みれば、より深かったことも推定できる。最大幅は約2mでほぼ東西方向に平行している。このため長方形の形状をしていたことが想定できる。壁面の立ち上がり角度は、70°前後である。主柱穴は五ヵ所検出した。深さは15~30cmで、底面の標高はいずれも5.5m前後であり、ほぼ均一な深度である。三ヵ所は壁面直上に見られ、柱痕跡において建物内部方向へ約80°の傾斜が認められる。

建物中央部には東西113cm、南北100cm深さ70cmで長方形の掘方（屋内土坑）を検出した。この掘方中央部には、長径68cm、短径51cm、深さ60cmの2段目の掘方が掘り込まれていた。覆土は乱れている部分もあるが、ほぼレンズ状に堆積している。最底面は粘性が非常に強く、均質なシルト層が確認できる。詳細な自然科学分析を行っていないものの、後述の滑石製玉製品の製作に伴う「砥糞」の影響と考えられる。これらの特徴から屋内土坑はいわゆる「工作用ピット」（寺村1969）の可能性が指摘できる。また土坑には幅20cmの溝が接続する。しかし建物と同様に南側が調査区外へと延びるため判然としない。

遺物は古墳時代中期の土師器壺（1）、滑石製玉製品の製作に伴う資料（28~63）、玉作工具の敲石（64）、砥石（65）が出土している。その他、滑石製玉製品の製作に関わる滑石の碎片が多く見られる。これらは特に屋内土坑の覆土内に多く認められる。白玉を主体として、勾玉を少量製作する様子がうかがえる。これら玉作関連の遺物から、本遺構は玉作を行った竪穴建物と言える。

B 掘立柱建物

掘立柱建物は10棟検出した。A1~A2、A5~B8グリッドの2か所に分布する。建物の所属時期は、建物周辺の遺物包含層や周囲の遺構から出土した遺物の年代から判断して、古墳時代中期~古代に属すと考えられる。これらの建物は南北方向の棟と東西方向の棟に大別でき、建物群の時期差を示す。遺構間の新旧関係から、南北棟から東西棟へ推移していく様子が認められる。

SB001 (図版8.20)

A1~A2に位置する。建物の北側は調査区外にのびる。桁行3間（5.41m）、梁行2間以上（4.00m以上）の隅柱建物である。桁行（長軸）方位はN-64°Wの東西棟である。柱穴は5基検出し、柱穴間隔は、桁行、梁行ともに約1.9mである。柱穴の平面形は円形・稍円形、断面形はU字状・箱状・半円状・弧状である。長径0.28~0.48m、短径0.27~0.37m、深さ0.17~0.42mである。柱穴の底面標高は5.51~5.74mである。柱穴深度にはばらつきが見られるが、底面標高で比較すると、深いP14・P45と浅いP18・P30・P75の2種に大別でき、前者は隅柱の柱穴と考えられる。柱根は遺存しないが、柱痕跡は2基で確認でき、幅18cm~22cmである。

遺物は、図示していないが古墳時代の所産と考えられる土師器胸部片がP14から出土している。

新旧関係は、SB008を構成する柱穴P15・P26とそれぞれP14・P45が隣接し、柱穴の切り合いP14<P15、P45<P26から、SB001が古く、SB008が新しい。

SB002 (図版8.20)

A1～A2に位置する。建物の西側と南側は調査区外にのびる。桁行2間以上(4.21m以上)、梁行1間以上(2.79m以上)の側柱建物である。桁行(長軸)方位N-13°Eの南北棟である。柱穴は4基検出し、柱穴間隔は、桁行で約2.1m、梁行では約2.4mである。柱穴の平面形は円形、断面形は漏斗状・弧状・箱状で、径0.23～0.51m、深さ0.22～0.40mである。柱穴の底面標高は5.51～5.66mである。柱根は遺存しないが、柱痕跡が1基で確認でき、幅20cmである。遺物はP40から古墳時代中期の所産と考えられる土師器の高杯(2)が出土している。

SB003 (図版9.20)

A6～B6に位置する。建物の南側は調査区外にのびる。桁行2間以上(4.02m以上)、梁行2間(4.48m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-20°Eの南北棟である。柱穴は5基検出し、柱穴間隔は、桁行約2.4m、梁行約2.3mである。柱穴の平面形は梢円形、断面形は漏斗状で、長径0.28～0.56m、短径0.22～0.53m、深さ0.03～0.38mである。柱穴の底面標高は5.38～5.70mである。柱根は遺存しないが、柱痕跡は3基で確認でき、幅18cm～22cmである。

遺物は図示していないが古墳時代の所産と考えられる土師器の胴部片がP114から出土している。

SB004 (図版9.21)

B6に位置する。建物の北側は調査区外にのびる。桁行1間以上(2.40m以上)、梁行2間(2.47m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-22°Eの南北棟である。柱穴は4基検出し、柱穴間隔は、桁行約2.2m、梁行約2.2～2.4mである。柱穴の平面形は円形・梢円形、断面形は台形状・弧状で、長径0.29～0.50m、短径0.26～0.34m、深さ0.09～0.21mである。柱穴の底面標高は5.53～5.69mである。遺物は出土していない。

建物の南に位置する溝(SD202)は梁行の柱穴列から約1mの間隔を開けて並列し、東西の隅柱付近において北側へと回り込むような形で検出した。柱穴において確認された覆土と同質であり、配置の類似性から同時期に埋没した溝と考えられる。

新旧関係は、SB006の柱穴P203、SB003の柱穴P230がSD202と、SB009の柱穴P195とP152が切り合い、これらからP203・P230 < SD202、P152 < P195で、SB003・SB006 < SB004 < SB009となる。

SB005 (図版10.21)

B6に位置する。建物の南側は調査区外にのびる。桁行2間以上(4.00m以上)、梁行2間(4.48m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-25°Eの南北棟である。柱穴は4基検出し、柱穴間隔は、桁行約2.4m、梁行約2.4～2.7mである。柱穴の平面形は円形・梢円形、断面形は弧状・半円状で、長径0.21～0.51m、短径0.18～0.46m、深さ0.08～0.17mである。柱穴の底面標高は5.58～5.68mである。遺物は出土していない。

桁行とSD200・SD220が、梁行とSD190が平行に位置する。柱穴において確認された覆土と同質であり、配置の類似性から同時期に埋没した溝と考えられる。

SB006 (図版10.21)

B6に位置する。建物の北側は調査区外にのびる。桁行1間以上(2.82m以上)、梁行2間(5.64m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-34°Eの南北棟である。柱穴は3基検出し、いずれも梁行方向の柱穴と考えられる。柱穴間隔は、梁行約2.8～3.0mである。柱穴の平面形は円形・梢円形、

断面形は漏斗状・台形状・半円状で、長径0.28~0.51m、短径0.25~0.37m、深さ0.19~0.27mである。柱穴の底面標高は5.45~5.57mである。遺物は出土していない。

SB007 (図版11.22)

B7~B8に位置する。建物の南側は調査区外にのびる。桁行1間以上(2.94m以上)、梁行1間以上(1.79m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-65°Wの南北棟である。柱穴は3基検出し、柱穴間隔は、桁行約2.5m、梁行約1.5mである。柱穴の平面形は円形・楕円形、断面形は弧状・漏斗状・V字状で、長径0.34~0.35m、短径0.28~0.32m、深さ0.07~0.46mである。柱穴の底面標高は5.37~5.70mである。

遺物は図示していないが古墳時代の所産と考えられる土師器の脚部片がP250から出土している。

SB008 (図版11.22)

A1~A2に位置する。桁行3間(7.15m以上)、梁行1間(2.30m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-88°Wの東西棟である。柱穴は8基検出し、柱穴間隔は、桁行約2.5m、梁行約2.2mである。桁行は3間のうち、中央の1間のみ南北両側共に側柱穴間隔が約2.1mと狭くなっている。柱穴の平面形は主に楕円形、断面形は台形状・U字状・半円状・階段状・漏斗状で、長径0.26~0.56m、短径0.23~0.43m、深さ0.17~0.68mである。柱穴の底面標高は5.37~5.67mである。柱痕跡は2基で確認でき幅18cm~22cmである。

遺物は図示していないが古代の所産と考えられる須恵器の脚部片がP36から出土している。また、土師器高杯の脚部(3)がP21から出土している。

SB009 (図版12.22)

A5~B6に位置する。桁行2間(4.96m)、梁行1間(2.44m)の東側に廂がつく側柱建物である。身舎の面積は12.1m²である。桁行(長軸)方位はN-62°Wの東西棟である。柱穴は身舎で6基、廂で2基を検出し、柱穴間隔は、桁行約2.5m、梁行約2.5m、廂の部分は桁行約1.2m、梁行約2.2mである。柱穴の平面形は主に楕円形、断面形は弧状が主体的だが漏斗状・台形状・半円状も確認される。長径0.30~0.39m、短径0.26~0.35m、深さ0.09~0.31mである。柱穴の底面標高は5.41~5.67mである。身舎の部分と廂の部分で、柱穴の特徴に大きな差異は見られない。遺物は出土していない。

SB010 (図版12.22)

B7に位置する。建物の北側は調査区外にのびる。桁行1間以上(1.95m以上)、梁行2間(4.34m)の側柱建物である。桁行(長軸)方位はN-4°Wの南北棟である。柱穴は3基を検出し、いずれも梁行方向の柱穴と考えられる。柱穴間隔は、梁行約2.1mである。柱穴の平面形は主に楕円形、断面形はV字状である。長径0.24~0.32m、短径0.18~0.28m、深さ0.14~0.36mである。柱穴の底面標高は5.42~5.61mである。遺物は出土していない。

C 土坑

土坑は10基検出した。平面形は円形・楕円形・長方形が主体で、1基のみ不整形である。底面は平坦なものが多い。覆土の堆積は単層状・レンズ状・ブロック状が見られる。このブロック状の堆積をする土坑には、いわゆる人為的埋土土坑〔坂上2003〕が含まれる(SK270)。

SK3 (図版13.24)

A1-10~A2-6に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長軸方位はN-52°Eを指す。

規模は長軸1.71m、短軸1.01m、深さ0.11mで、底面標高は5.77mである。覆土は単層の黒褐色粘質土であり、多量の炭化物を含む。遺物は古墳時代・古代の土師器片が出土した。このうち(4)などに見られる古墳時代の土師器片については、床面直上ないし床面から出土するため、SK3に先行するSK35に属する可能性が考えられる。新旧関係は、SB001の建物内に位置すること、P40(SB002柱穴)、P36(SB008柱穴)、SD1との切り合いからSB001・SB002 < SB008 < SK3 < SD1である。新旧関係から古墳時代でもより後発的なものと考えられる。

SK4 (図版13.24)

A2-12に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状である。長軸方位はN-33°Wを指す。規模は長軸1.17m、短軸0.93m、深さ0.61mで、底面標高は5.17mである。覆土はレンズ状に堆積し2層に分層される。少量の炭化物を含んだ灰白色粘質土が主体であるが、一部はIV層ブロック土を多量含んだ灰色粘質土である。上層の灰白色粘質土は粘性が著しく強い。新旧関係は、SD7との切り合い、SD7と平行に検出でき同時期・同性格の遺構と考えられるSD8とP44(SB008柱穴)との切り合いP44 < SD7・SD8から、SB008 < SD7・SD8 < SK4である。所属時期は判然としないが、新旧関係より古代以降に属すると考えられる。

SK5 (図版13.23)

A1-15~20に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。長軸方位はN-10°Wを指す。規模は長軸2.12m、短軸0.16m、深さ0.35mで、底面標高は5.48mである。覆土はレンズ状に堆積し2層に分層される。下層は炭化物を少量含む暗灰黄色粘質土、上層は炭化物とブロック土を多量含んだ黒褐色粘質土である。遺物は古墳時代・古代の土師器がまとまって出土している(5~12)。個体数は判別できる範囲で古墳時代の壺4点、高杯の脚部2点、壺1点、古代の壺1点を数える。このうち古代の遺物は覆土の最上層部から出土するのみで遺物包含層堆積時のものと考えられる。遺構の性格としては古墳時代に属する廃棄土坑の可能性が考えられる。新旧関係は、SD1との切り合いでから、SK5 < SD1である。

SK35 (図版13.24)

A1-10~A2-6に位置する。平面形は長方形で、断面形は台形状である。長軸方位はN-0°を指す。規模は長軸0.90m、短軸0.73m、深さ0.15mで、底面標高は5.62mである。遺物は図示していないが、古墳時代の土師器片が多く出土している。前述のようにSK3から出土した古墳時代の土師器片はここに属する可能性が考えられる。新旧関係は、SK35 < SK3である。

SK53 (図版13.24)

A3-18~19に位置する。平面形は梢円形で、断面形は弧状である。長軸方位はN-38°Eを指す。規模は長軸1.31m、短軸0.97m、深さ0.15mで、底面標高は5.53mである。覆土はブロック状に堆積し3層に分層される。少量の炭化物とIV層ブロック土を含む黒褐色粘質土が主体的で、灰白色粘質土・灰色粘質土も確認できる。遺物は出土していない。覆土が類似するSK55とは規模や深度から同時期の遺構と考えられる。

SK55 (図版13.24)

A3-17に位置する。平面形は長方形で、断面形は箱状である。長軸方位はN-0°を指す。規模は長軸1.98m、短軸0.60m、深さ0.20mで、底面標高は5.39mである。覆土はレンズ状に堆積し3層に分層され、少量の炭化物を含む灰色粘質土が主体である。遺物は中世の珠洲の胴部片(13)が出土し

ている。

SK270 (図版13.24)

B5-2に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。長軸方位はN-42°Eを指す。規模は長軸0.98m、短軸0.87m、深さ0.57mで、底面標高は4.91mである。覆土はブロック状に堆積し2層に分層する。覆土に拳大～人頭大のブロック土が非常に多く確認されることから、いわゆる人為的埋土坑と考えられる。遺物は出土していない。

D 井戸

SE280 (図版13.24)

A4に位置する。平面形は方形で、断面形は台形状である。長軸方位はN-64°Eを指す。規模は長径0.70m、短径0.59m、深さ0.71mで、底面標高は4.72mである。井戸側と考えられる木質や礫などは出土せず、素掘りである。覆土は3層に分層でき、下層から順に暗灰色粘質土、黒褐色粘質土、灰色粘質土が水平状に堆積している。覆土2層は腐植を層理状に多量含んでいることから、祭祀行為などに伴い意図的に埋めた可能性が考えられる。遺物は出土していない。

E 溝

6条検出した。多くの溝が、調査区外に延びているか、ほかの造構に削平されているため、総延長など全容が判然としない。溝の形状は地形なりに平行や直交するものが多く、直線的なものが多い。SD1のように一部「十字」になるものも見られる。

SD1 (図版3.25)

A1～A2に位置する。長軸はN-56°Eを指す。長さ7.89m以上、幅0.63～0.78m、深さ0.16mである。断面形は弧状である。A2-8付近で南北方向にのびる溝と交差する。覆土は2層に分層できレンズ状に堆積する。上位が灰白色粘質土、下位が灰色粘質土である。遺物は図示していないが、古墳時代・古代の土師器片、古代の須恵器片、近世陶磁器片（肥前系磁器）、石器、木製品が出土している。新旧関係は、切り合（SK5・SK35・SD9 < SD1）より、造構検出面において最も新しい造構である。また覆土がⅡa層より上位のものと類似することと、床面から18世紀の所産と考えられる肥前系磁器が出土していることから、近世の水田に伴う用水の可能性が考えられる。

SD2 (図版3.25)

A1に位置する。長軸はN-53°Eを指す。両側は調査区外に延びる。長さ1.35m以上、幅0.40～0.45m、深さ0.13mである。断面形は半円状である。覆土は単層で黒褐色粘質土が堆積する。遺物は図示していないが、古墳時代の土師器片が出土した。SB002の覆土と軸方向が共通することから、何らかの関係性がうかがわれるが判然としない。

SD6 (図版3.25)

A2に位置する。長軸はN-14°Eを指す。南北方向の直線的な溝で南側は調査区外にのび、SD7・SD8と平行している。長さ1.58m以上、幅0.27～0.48m、深さ0.10mである。断面形は弧状である。覆土は炭化物を少量ふくむ灰色粘質土の単層である。遺物は図示していないが、古墳時代の土師器片が出土している。数条平行する溝が並ぶ点でA5以東の畠状小溝に類似する。

SD7 (図版3.25)

A2に位置する。長軸はN.7°Wを指す。南北方向の直線的な溝で南側は調査区外にのび、SD6・SD8と平行している。長さ221m以上、幅0.18~0.48m、深さ0.10mである。断面形は弧状である。覆土は炭化物を微量含む灰色粘質土の単層である。遺物は出土しない。SD6と同様、A5以東の歓状小溝に類似する。

SD8 (図版3.25)

A2に位置する。長軸はN.1°Eを指す。南北方向の直線的な溝で南側は調査区外にのび、SD7・SD8と平行している。長さ1.45m以上、幅0.28~0.45m、深さ0.08mである。断面形は台形状である。覆土は炭化物を微量含む灰色粘質土の単層である。遺物は図示していないが、古墳時代の土師器片が出土している。SD6・SD7と同様、A5以東の歓状小溝に類似する。

F ピット

ピットは240基検出した。掘立柱建物の柱穴分47基を除くと183基となるが、そのうち23基で柱痕跡が確認できる。これらの多くが掘立柱建物に伴うものと考えられるが、新旧関係や配置が複雑なため、本報告時点では掘立柱建物を構成することが出来なかった。

P210 (図版13.23)

B6-8に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は長軸0.64m、短軸0.64m、深さ0.14mで、底面標高は5.61mである。覆土はレンズ状に堆積し2層に分層される。少量の炭化物を含む灰色粘質土が主体である。遺物は略完形の古墳時代中期の壺(14)が1点出土した。出土状況から、土器は埋没時もしくは埋没後に上方からの圧力によって破損したと考えられる。新旧関係は、切り合いでP210 < SD220である。

G 歓状小溝 (島)

21条の平行した溝より構成される。各溝は幅や深さが一定であり、いわゆる歓状小溝と考えられる。今回発掘調査の検出面はIV層だが、基本層序の観察によれば、実際の掘り込み面はIII層上部である。時期は遺物が伴わないため判然としないが、少なくとも12世紀以降の所産と考えられる。

SD77~97 (図版6.25)

A4~B8に位置し、特にA4~A6に集中している。いずれも長軸は南北方向でN.12°E ~ N.38°Eを指す。南北両側が調査区外にのび全容は判然としない。断面形はすべて弧状である。深さは0.14~0.20mの範囲で収まる。覆土は炭化物を微量含む灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。溝間に規則性は見られないが、B7周辺で検出数が少なくなる傾向がある。溝間は40cmの次の区画が80cm、30cmの次の区画が65cmと直前の溝間よりおよそ倍になる傾向にある。

第V章 遺物

1 遺物の概要

角田遺跡第4次発掘調査で出土した遺物は、整理箱で7箱である。古墳時代から近世の遺物が見られるが、主体は古墳時代中期である。内容は土器・陶磁器が主体で、石器・石製品、木製品なども見られる。土器・陶磁器の主な時期は、古墳時代中期（5世紀）と古代（9世紀後半～10世紀前半）である。石製品はSI100から出土した滑石製石製品の製作に関連したものが多く、白玉未成品や敲石、砥石が見られる。遺物の分布はA1およびA6～B8に多く見られ、特に堅穴建物や土坑を主体に出土している。層位の傾向は、遺構の覆土が多く、遺物包含層はわずかである。なお土器・陶磁器の器種分類・年代観は、下境井遺跡〔柏崎市2013c〕を参考とし記載した。

2 遺物の各説

A 土器

土器・陶磁器の種別は、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲、その他の陶磁器が出土している。ここでは遺構毎に遺物の概要を記載するが、詳細は「土器・陶磁器観察表」を参照されたい。

SI100 (図版14.26) 1は壺の口縁部である。頸部が「コ字状」に屈曲している。口縁端部に面取りは見られない。口縁部に対して頸部が肥厚する。古墳時代中期に比定する。

SB002-P40 (図版14.26) 2は高杯の杯部と脚部の一部である。杯部は内湾しており、風化により不明瞭だがわずかに段が見られる。脚部はエンタシス状に中央が膨れた形状である。古墳時代中期に比定する。

SB008-P21 (図版14.26) 3は高杯の脚部の裾である。脚部と裾の境に明瞭な面が見られる。推定径から2に対応する比較的大きな形態が想定できる。古墳時代中期に比定する。

SK3 (図版14.26) 4は高杯の杯部と脚部を境する屈曲部である。風化により非常に不明瞭だが、周辺から出土している土器片や、胎土の観察から古墳時代中期に比定する。

SK5 (図版14.26) 5～8は壺の口縁部である。5・6は頸部が「く字状」に屈曲している。口縁端部に面取りは見られない。7・8も頸部の長さが異なるものの同一の形状と想定できる。5・7は器壁が均等な厚さなのに対し、6・8は口縁部に対して頸部が肥厚する。9・10は壺の口縁部である。9は有段形態で、10は頸部が直線的に立ち上がる。11・12は高杯の脚部の裾である。エンタシス状に中央が膨れた形状で、いずれも縦位のミガキが見られる。これらはすべて古墳時代中期に比定する。

SK55 (図版14.26) 13は珠洲の胴部片である。外面には平行線文のタタキ目が見られる。

P210 (図版14.26) 14は略完形の壺である。口縁部は有段形態である。全体に風化が少ないため、斜位のハケスが明瞭に観察できる。古墳時代中期に比定できる。

遺物包含層-Ⅲ層 (図版14.26) 15～21は壺の口縁部である。20を除けば、いずれも面取りがなく、「く字状」に屈曲している。20は全体に風化が著しく判然としないが、古代の長壺の可能性も考えられる。22は壺の口縁部で、有段形態である。23は高杯の脚部の裾である。脚部と裾の境に明瞭

な面が見られる。推定径から比較的大きな形態が想定できる。24はロクロ成形の無台杯の口縁部である。器壁は直線的に立ち上がる。25は有台杯の底部である。細かいロクロ成形痕が内外面に見られる。高台の端部はわずかに内傾する。26は杯蓋である。口縁は外反し、口縁端部に明確な稜を持つ。27は壺の胴部片である。外面は平行線文のタキ目、内面は同心円文當て具痕が明晰に残る。13・20・24・25が古代なことを除けば、すべて古墳時代中期に比定する。

B 石器・石製品

SI100（図版14.26）28・29は白玉である。いずれも側面が太鼓胴状に膨らみ、中央にわずかな稜が形成される形状である。SI100で製作される白玉の目的形状を示すと考えられる。正面と裏面が平行し入念に研磨される。30～61は白玉の未成品あるいは製作関連の資料である。30～49は研磨や穿孔がある資料である。30～36は左側面を欠損していることから、穿孔時の破損とも想定できる。しかし側面研磨が進行しているため、研磨時に節理などの影響で破損したものの可能性が高い。37～42は穿孔が見られるものの、側面研磨が無いものである。新旧関係で微細な剥離は研磨に先行することが多いようである。その関係から43～46は穿孔途中に破損したものと言える。47～49は穿孔の直前段階における穿孔具の設置を意図したいわゆる「あたり痕」を示すものである。49はその打撃途上で折損したと考えられる。

50～56は穿孔がなく、剥離と研磨のみの資料である。52・53のように厚手のものや、55・56のように薄手のものが認められるが、対向する両面が平行していることは共通する。側縁は折断や微細な剥離により成形し、直線的な稜線に仕上げている。57～60は剥離のみの資料である。57は側面を折断で、58・59は微細な剥離で平坦に成形している。60・61は右側縁を主体に剥離しているが、成形が不十分と考えられる。あるいは、ここから折断により方形に近い形状の素材を獲得する工程が推定できる。

62・63は勾玉未成品である。62は疊面を伴う剥片を用いて、左側縁を剥離で円弧状に、右側面を研磨で平坦に調整している。63は両面を研磨で、右側縁を折断で平坦に調整している。いずれも「D字状」に成形している。

64は円礫を用いた敲石である。敲打痕は少量だが下端に見られる。65はいわゆる貝殻状剥片〔新潟県1986〕を用いて、下端部に砥面を形成する内磨砥石である。ただし砥面は残っておらず、下端は敲打痕のみである。また正面にも敲打痕が見られる。このことから砥面の再生の際、左右側面が折損したものと考えられる。

遺物包含層-Ⅲ層（図版14.26）66・67はいずれも砥石である。66は棒状礫を素材として、面上に使用している。敲打痕や剥離痕は、砥面の再生によるものと考えられる。67は溝状の砥面を6条もつ砥石である。

C 木製品

遺物包含層-Ⅱ層（図版14.26）68は下駄である。柾目板を素材として、つま先部分に穿孔が見られる。裏面中央には組み合わせの歯が認められる。このことからいわゆる「露卯下駄」とできる。出土位置・層位から勘案して江戸時代以降の所産と考えられる。

第VI章　まとめ

1　遺構の変遷

A　遺構主軸の傾向

角田遺跡第4次調査で検出した遺構は、堅穴建物1棟、掘立柱建物5棟、土坑5基、井戸1基、溝11条、ピット240基と、島に連なる畝状小溝と考えられる溝列である。大多数の遺構は、出土遺物や遺構に堆積する覆土から、古墳時代中期（5世紀）と古代（9世紀後半～10世紀前半）の所産と判断できる。このことから少なくとも2～4時期以上の変遷が考えられる。この集落構成変遷の考察に必要なのは「遺構主軸の方位」と仮定した。そして本遺跡の遺構では、掘立柱建物において特徴的な傾向が見られる。ここでは、まず掘立柱建物の概要と建物主軸の傾向を確認する。

建物の構造が想定できるものは、すべて側柱建物である。廂の有無は、調査区が狭小であり、推定が困難な状況であるが、1棟（SB008）確認できた。規模（総面積）は、最大で21.60m²以上（SB001）、最小で12.10m²（SB009）である。ただし、ここに挙げた規模はすべて復元であるため、実態は判然としない。柱間数は、桁行では1間が1棟（SB008）で、2間以上が9棟（ほかすべて）である。近隣地域での事例と比較すると、本遺跡での長軸方向の間隔、柱間数の主体は桁行2間、梁行2間といえる。ピット間隔では、20m以下（SB001）が1棟で、その他は24m前後が主体である。桁行より梁行の柱間隔が大きくなる建物が2棟（SB002、SB007）、梁行と桁行で柱間間隔が共通するのが、8棟（ほかすべて）である。

建物主軸の方向性は、南北棟が3棟（SB003、SB004、SB006）、東西棟が5棟（SB001・SB002・SB005、SB008、SB009）、不明が2棟（SB007、SB010）である。建物方向を南北棟は桁行、東西棟は梁行を主軸として見た場合、SB001～007ではN20°～34°Eの範囲となり、SB008～010では、概ねN4°～18°Eに収まる。このことから古代に比定する建物（SB008～SB010）においては、建物主軸がより東西軸に沿った建物が主体になるという想定ができる。

B　遺構の変遷と時期

遺構の新旧関係や主軸方向性の関連から、掘立柱建物を中心とした遺構の変遷を想定した（第6図）。ただし今後も周辺の調査範囲拡大が想定され、再度建物構造や分布について検討を要する。

1段階（古墳時代①） 該当する遺構は、SI100とSB006とSK35である。

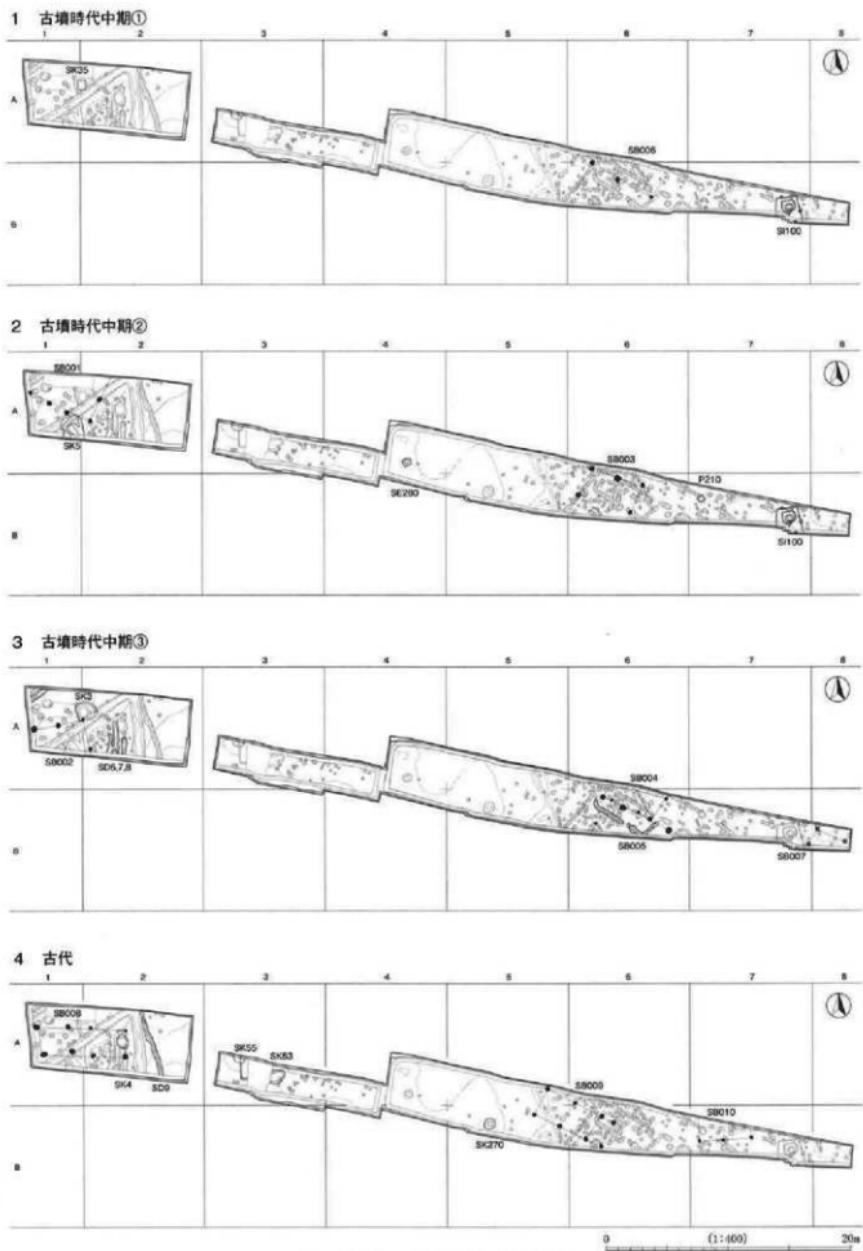
2段階（古墳時代②） 該当する遺構は、SI100とSB001、SB003、SK5などである。出土遺物から、戸口遺跡B22～23【柏崎市1987b】、礼坊遺跡SK-2a【柏崎市1985a】に比定する。

3段階（古墳時代③） 該当する遺構は、SB002、SB004、SB005、SB007、SK3などである。

SB002とSK3では新旧関係により、SB002<SK3となり、SB004とSB005は判然としない。

4段階（古代） 該当する遺構は、SB008、SB009、SB010とSK4、SK53、SK55、SK270、SD9である。出土遺物から、（9世紀後半～10世紀前半）に比定する。

時期を問わず、建物・遺構などの分布に偏りは見られない。また規模や構成において、同様の集落が断続的に営まれていた様子がうかがえる。



第6図 角田遺跡 時期別遺構分布図

2 白玉の製作について

A 製作工程の復元

玉作関連の堅穴建物であるSI100からは滑石製玉製品の製品・未成品が多量出土した。特に白玉関連の資料が中心で、研磨から穿孔にいたるものが多く見られた。ここではその製作工程の復元を試みる。作業工程の復元において、研磨・穿孔を細分できるほか、微細な剥離などの工程が新たに確認できた。6段階の工程にわけることができ、以下に内容と概要を示す(第7図)。

第1工程 (素材段階) 石材の搬入～素材剥片を剥離する段階である。本遺跡で、石材の搬入段階を直接示す資料は見られないが、多量出土した滑石碎片から判断できる。滑石の原礫を採集し、打撃により分割する工程が想定できる。ただし遺跡内において原礫面をもつものはほとんど見られないことから、採集地において表皮を荒削除去した状態で搬入していることが想定できる。剥片段階の資料が少ないと判然としないが、素材剥片は方形～横長が中心で、剥片剥離において節理を利用したものが多いと推定できる。

第2工程 (剥離段階) 素材剥片を剥離調整などにより、成形する段階である。主に側面に対する剥離が主体となる。作業は折取(折断調整)、微細剥離で、最終的には四角形状に成形する。厚さや最大径がより目的物に近づけられるが、大きさは不揃いである。本遺跡で見られる滑石碎片の多くは、この段階で発生したものと考えられる。

第3工程 (研磨段階) 研磨を行い、表裏面を並行に仕上げる段階である。並行して微細な剥離で、さらに成形する資料も認められる。この調整により、およそその厚さ(2.0～4.9mm)が規定される。一部側面を研磨する資料も見られるが、主体は微細な剥離のみである。

< 第2工程 > 剥離段階		< 第3工程 > 研磨段階		< 第4工程 > 穿孔段階		< 第5工程 > 側面研磨段階		< 第6工程 > 仕上げ研磨段階	
第1工程 素材段階	剥離	研磨	穿孔初期	穿孔(両面)	多角形状	円弧状	仕上げ研磨		
	61	56	49	46	39	35	00	29	
	60	55	48	45	38	34	00	28	
	59	54	47	44	37	33	00	27	
	58	53	46	43	36	32	00	26	
	57	52	45	42	35	31	00	25	
	50	51	44	41	34	30	00	24	
第7図 角田遺跡堅穴建物(SI100)における白玉製作工程									
Scale: (2:3) 5cm									

第4工程（穿孔段階） 正面と裏面が平行する平坦面に対して、穿孔を行う段階である。穿孔初期と穿孔の段階に細分できる。穿孔初期の段階でいわゆる「あたり」と呼ばれる、穿孔する箇所に円形の傷をつける様子が見られる。あたりは正面と裏面のどちらか一方に設けられるのみである。両面穿孔が多く、穿孔径は1.4~2.1mmではほぼ同一形状の工具を使用していると想定できる。また穿孔段階で折損している資料が比較的多いことから、作業的に最もリスクのある作業と考えられる。

第5工程（側面研磨段階） 側面の調整痕を消すように四角形や六角形に研磨する段階である。多角形状と円弧状の段階に細分できる。多角形は微細な剥離痕の向きに合わせて平坦に研磨している。円弧状は特定の面が見られず、最大径が3.0~5.0mmに規定されている。このことから、溝状の砥面をもつような円弧のある砥石が推定される。折損した資料を観察すると、節理による剥離痕が多く認められる。このことから、研磨中に節理の影響で剥落するリスクの多さが想定できる。

第6工程（仕上げ研磨段階） 仕上げの研磨により、成形時の擦痕を除去する段階である。本遺跡で、この段階を示す資料は図示した2点のみである。これは仕上げ段階を踏まえた資料は、搬出されることが主となり製作場所に残されないことが要因である。またこの段階で使用される工具類は、木や皮などの有機物が想定され、遺跡内に残されていない。

製作で使用される工具は敲石、砥石が見られる。研磨～穿孔に至る工程では主に鉄器の利用が想定できるが、本遺跡において該当する工具の出土はなかった。ただし臼玉選別の際、同サンプル群に磁石を寄せたところ、不整形な2~5mmの微細鉄片が約30点選別されたことは示しておきたい。

B 近隣地域での検出例と比較

最後に管見ながら、周辺遺跡の出土例と比較してみたい。新潟県では上越市南原遺跡（後期）糸魚川市六反田南遺跡（後期）、笛吹田遺跡（中・後期）、姫御前遺跡（後期）、大角地遺跡（後期）、田伏遺跡（後期）、三ツ又遺跡（中期）にて検出例がある。分布は上越・糸魚川が中心で、柏崎市域では初例となる。この出土例を素材・加工・形に着目して分類し、傾向を以下のようにまとめる。

柏崎市角田遺跡（古墳時代中期）

素材：方形～横長の剥片。作業面や主要剥離面の凹凸が大きい。最大厚2.0~4.9mm。

加工：折断または微細な剥離+研磨→穿孔（両面）→研磨→仕上げ。

形：太鼓胴状に膨らみ、中央にわずかな稜が形成される形状。最大厚、最大径にばらつき。

上越市南原遺跡、糸魚川市六反田南遺跡、糸魚川市大角地遺跡（古墳時代後期が主体）

素材：板状の素材から折り取った小片。極めて平坦。最大厚2.8~3.3mm（六反田南遺跡の類例）

加工：折断→穿孔（両面）→研磨→仕上げ。角田遺跡の「第3工程」における欠如。

形：太鼓胴状～寸胴状で、中央に稜がみられない形状。最大径にばらつき。最大厚は均一。

この中で注目しなければならないのは、上越・糸魚川にて見られる事例において、角田遺跡と素材が大きく異なることがある。この違いが加工や最終的に仕上がる形状に影響を与える結果となっている。これは、製作技術や工具の違いを示すと考えられる。ただしこの違いが、時期差あるいは地域差を示すものかは、関係資料が乏しく判然としない。今後の柏崎市域における類例の増加、そして関東地域における類例との比較検討が課題となる。

引用・参考文献

- 相沢 央 1998 「八幡林遺跡と郡の支配」『新潟史学』第40号 新潟史学会
- 岡本郁栄ほか 1987 「柏崎農業高等学校々庭遺跡」柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料（図・拓本・説明） 柏崎市史編さん室
- 柏崎市教育委員会 1985 a 「吉井遺跡群」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 柏崎市教育委員会 1985 b 「刈羽大平・小丸山」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 柏崎市教育委員会 1987 a 「西岩野」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 柏崎市教育委員会 1987 b 「吉井水上I 遺跡 戸口遺跡」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 柏崎市教育委員会 1989 「吉井行塚古墳群」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 柏崎市教育委員会 1990 「吉井遺跡群II」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 柏崎市教育委員会 1991 「小見石」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 柏崎市教育委員会 1995 「柏崎市の遺跡IV」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 柏崎市教育委員会 1996 「田塚山遺跡群」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 柏崎市教育委員会 1999 「角田」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 柏崎市教育委員会 2000 a 「横山東遺跡群I」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 柏崎市教育委員会 2010 「坂田遺跡群III」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 柏崎市教育委員会 2011 「南条遺跡群」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第64集
- 柏崎市教育委員会 2012 a 「柏崎市の遺跡21」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 柏崎市教育委員会 2012 b 「音無瀬I」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集
- 柏崎市教育委員会 2013 a 「角田遺跡（第5次）」「柏崎市の遺跡22」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第71集
- 柏崎市教育委員会 2013 b 「音無瀬II」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第72集
- 柏崎市教育委員会 2013 c 「下境井」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第73集
- 柏崎市教育委員会 2015 a 「上原」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第78集
- 柏崎市教育委員会 2015 b 「柏崎市の遺跡24」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第80集
- 刈羽村教育委員会 1992 「西谷遺跡発掘調査報告書」刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 刈羽村教育委員会 1995 「枯木A遺跡発掘調査報告書」刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集
- 刈羽村教育委員会 1998 「払川・山ノ脇遺跡発掘調査報告書」刈羽村埋蔵文化財調査報告書第3集
- 金子拓男 1990 「第6章第5節 交通と交通路、第6節 延喜式内神社」『柏崎市史 上巻』 新潟県柏崎市史編纂委員会
- 坂井秀弥 1983 「歴史的背景と栗原遺跡の性格」「栗原遺跡—第6次発掘調査概報」 新潟県教育委員会
- 鈴木郁夫ほか 1988 「土地分類基本調査 岡野町」 新潟県
- 鈴木郁夫ほか 1989 「土地分類基本調査 柏崎・出雲崎」 新潟県
- 寺村光晴 1969 「勾玉の故郷 はまやま」 富山県教育委員会・朝日町教育委員会
- 徳間正一ほか 1990 「第10章 柏崎市域の大地のおいたち」「柏崎市史 上巻】
- 新潟県考古学会編 1999 『新潟県の考古学』 高志書院
- 新潟県教育委員会 1986 「中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡—北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書 I—I】

新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1988 「西田・鶴巻田遺跡群」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1990 「和泉A遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000 「青田遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003 「上浦遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005 「東原町遺跡・下沖北遺跡II」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008 「寺前遺跡 一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書III」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第189集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011 「古渡路遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第221集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012 「山崎遺跡一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書VI」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第241集

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 「箕輪遺跡II」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第254集

西山町教育委員会 1983 「高塙B遺跡発掘調査報告書」 西山町埋蔵文化財調査報告書第1集

西山町教育委員会 2001 「畠田遺跡発掘調査報告書」 西山町埋蔵文化財調査報告書第5集

細井佳浩 2014 「新潟県における古代の『歎状小溝（轟）』について」一越後国域の検出事例から—「三面川流域の考古学」第12号 pp.55~76

吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

米沢 康 1976 「古代北陸道の伝聞制について」『信濃』第28卷5号 信濃史学会

米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32卷6号 信濃史学会

和島村教育委員会 1994 「八幡林遺跡」 西山町埋蔵文化財調査報告書第3集

柱立柱建物(SB)観察表

凡例:()は残存数

造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB001	8	20	N-64° -W	3間以上×2間以上 長方形/側往構造	21.6m ² 以上	5.41m	4.00m以上	
柱穴(身舎)	位置	柱根	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P14	A1-8	無	円形	0.28	0.27	U字状	0.42	5.51
P18	A1-14	無	円形	0.35	0.33	箱状	0.17	5.74
P30	A1-5	無	椭円形	0.36	0.31	半円状	0.16	5.73
P45	A2-16	無	椭円形	0.35	0.31	半円状	0.28	5.52
P75	A2-6	無	椭円形	0.48	0.37	彌状	0.19	5.63
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB002	8	20	N-13° -W	2間以上×1間以上 長方形/側往構造	11.8m ² 以上	4.21m	2.79m以上	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P20	A1-13,14	無	円形	0.51	0.48	漏斗状	0.40	5.51
P23	A1-14,15	無	円形	0.38	0.38	彌状	0.22	5.66
P40	A1-15,A2-11	無	円形	0.26	0.23	箱状	0.35	5.63
P38	A2-16	無	円形	0.31	0.29	箱状	0.27	5.55
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB003	9	20	N-20° -E	2間以上×2間以上 長方形/側往構造	18.0m ² 以上	4.02m以上	4.48m	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P114	B6-6	無	椭円形	0.28	0.22	漏斗状	0.03	5.70
P118	B6-22	無	椭円形	0.47	0.42	彌状	0.12	5.60
P224	B6-2,3	無	円形	0.56	0.53	漏斗状	0.38	5.38
P156	B6-3	無	椭円形	0.41	0.33	漏斗状	0.27	5.53
P230	B6-8	無	椭円形	0.34	0.27	漏斗状	0.11	5.65
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB004	9	21	N-22° -E	1間以上×2間以上 長方形/側往構造	5.9m ² 以上	2.40m以上	2.47m	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P164	B6-4	無	円形	0.29	0.26	台形状	0.09	5.69
P216	B6-9	無	椭円形	0.39	0.34	彌状	0.10	5.69
P215	B6-3	無	椭円形	0.50	0.43	彌状	0.12	5.66
P152	B6-2	無	椭円形	0.44	0.39	台形状	0.21	5.53
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB005	10	21	N-25° -E	2間以上×2間以上 長方形/側往構造	17.9m ² 以上	4.00m以上	4.48m	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P131	B6-7	無	円形	0.21	0.18	彌状	0.10	5.65
P207	B6-2	無	円形	0.24	0.21	彌状	0.17	5.58
P212	B6-3	無	椭円形	0.24	0.20	半円状	0.16	5.63
P213	B6-10	無	椭円形	0.51	0.46	半円状	0.06	5.68
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB006	10	21	N-34° -E	1間以上×1間以上 長方形/側往構造	15.9m ² 以上	2.82m以上	5.64m	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P135	B6-1	柱根状	椭円形	0.42	0.37	漏斗状	0.27	5.45
P194	B6-2,3	無	椭円形	0.48	0.37	台形状	0.26	5.49
P203	B6-9	無	円形	0.28	0.25	半円状	0.19	5.57
造構No.	図面図版	写真図版	方位(桁行)		構造	面積	桁行	梁行
SB007	11	22	N-45° -W	1間以上×1間以上 長方形/側往構造	5.3m ² 以上	2.94m以上	1.79m以上	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P277	B7-15	無	椭円形	0.35	0.31	彌状	0.07	5.70
P258	B8-6	柱根状	椭円形	0.34	0.28	漏斗状	0.45	5.37
P250	B8-12	柱根状	円形	0.34	0.32	V字状	0.46	5.38

掘立柱建物(SB)観察表

造構No.	図面図版	写真図版	方 位(航行)	構 造		面積	航行	梁行
				N-88° ~W	1間×3間 長方形/側柱構造			
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P15	A1-9	無	楕円形	0.52	0.43	台形状	0.25	5.67
P21	A1-10	無	楕円形	0.41	0.36	台形状	0.27	5.63
P36	A2-6	無	円形	0.26	0.24	U字状	0.17	5.60
SD8-P1	A2-7	無	円形	0.26	0.23	U字状	0.21	5.59
P44	A2-17	無	楕円形	0.45	0.40	半円状	0.36	5.37
P26	A2-11	無	楕円形	0.42	0.34	台形状	0.34	5.49
P25	A1-15	無	楕円形	0.46	0.41	隔壁状	0.68	5.35
P13	A1-14	無	楕円形	0.56	0.38	漏斗状	0.21	5.65
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P109	12	22	N-62° ~W	2間×1間 長方形/側柱構造		12.1m ²	4.96m	2.44m
P116	A5-25	無	楕円形	0.38	0.34	弧状	0.13	5.57
P167	B6-1	無	楕円形	0.32	0.26	弧状	0.09	5.61
P195	B6-2	柱根状	円形	0.36	0.34	漏斗状	0.10	5.64
P104	B6-6	無	楕円形	0.39	0.35	弧状	0.10	5.67
P98	B5-5	柱根状	楕円形	0.36	0.26	漏斗状	0.14	5.56
P261	B5-4	無	円形	0.30	0.35	台形状	0.17	5.41
柱穴(東面廻)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P125	B6-2	無	楕円形	0.39	0.31	半円状	0.22	5.59
P123	B6-7	無	楕円形	0.34	0.26	台形状	0.13	5.62
造構No.	図面図版	写真図版	方 位(航行)	構 造	面積	航行	梁行	
SB010	12	22	N-4° ~W	1間以上×2間以上 長方形/側柱構造	8.5m ² 以上	1.95m以上	4.34m	
柱穴(身舎)	位置	柱根・柱痕跡	平面形	長径(m)	短径(m)	断面形	深さ(m)	底面標高(m)
P185	B7-6	無	楕円形	0.24	0.18	V字状	0.14	5.61
P247	B7-7	無	円形	0.24	0.24	V字状	0.16	5.59
P249	B7-3	無	楕円形	0.32	0.28	V字状	0.36	5.42

溝(SD)観察表

種別	遺構番号	図面図版	写真図版	位 置	断面形	方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	凡例:()は残存値	
											主要な切り合い	備考
SD	1	3	25	A1,A2	弧状	N-56° -E	7.89	0.78~0.63	0.16	近世陶器器 SB001,SB002, SB008<	SK3,SK5,SD9, SB001,SB002, SB008<	18世紀以降
SD	2	3	25	A1-8,9	半円状	N-53° -E	1.35	0.49~0.45	0.13	-	-	-
SD	6	3	25	A2-12,17	弧状	N-14° -E	1.58	0.27~0.48	0.10	-	=SD7	-
SD	7	3	25	A2-12,17	弧状	N-7° -W	2.21	0.18~0.48	0.10	-	=SD6	-
SD	8	3	25	A2-12,17	台形状	N-1° -E	1.45	0.28~0.45	0.08	-	SB008< <SK4	-
SD	9	3	25	A2-8,13,14,19	台形状	N-18° -W	5.08	0.23~0.50	0.34	-	<SD1	-
SD	190	-	-	A6,B6	半円状	N-42° -E	4.04	0.17~0.28	0.13	-	SB006<	-
SD	200	-	0	B6	半円状	N-60° -W	4.79	0.18~0.33	0.08	-	SB003<	-
SD	202	9	25	B6	弧状	N-50° -W	5.63	0.25~0.41	0.10	-	SB003, SB005 <	-
SD	220	-	-	B6,7	弧状	N-61° -W	2.68	0.19~0.36	0.09	-	-	-
SD	240	-	-	B7-7	台形状	N-51° -W	1.76	0.21~0.40	0.20	-	<SB010	-
SD	256	-	-	B7-9	台形状	N-66° -W	1.23	0.21~0.36	0.07	-	-	-

壺状溝(SD)観察表

種別	遺構番号	図面図版	写真図版	位 置	断面形	方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	凡例:()は残存値	
											主要な切り合い	備考
SD	77	6	25	A5,B5	台形状	N-31° -E	1.14	0.18~0.38	0.20	-	-	-
SD	78	6	25	A5,B5	V字状	N-37° -E	1.54	0.33~0.45	0.19	-	-	-
SD	79	6	25	A5,B5	半円状	N-35° -E	2.34	0.45~0.49	0.11	-	-	-
SD	80	6	25	A6,B5,B6	半円状	N-38° -E	4.61	0.38~0.51	0.11	-	-	-
SD	81	6	25	A6,B5,B6	台形状	N-36° -E	4.48	0.39~0.40	0.14	-	-	-
SD	82	6	25	A6,B6	弧状	N-26° -E	4.10	0.22~0.38	0.09	-	-	-
SD	83	6	25	A6,B6	台形状	N-24° -E	4.01	0.21~0.35	0.06	-	-	-
SD	84	6	25	A6,B6	弧状	N-22° -E	3.88	0.24~0.38	0.04	-	-	-
SD	85	6	25	B6	半円状	N-22° -E	4.00	0.34~0.39	0.04	-	-	-
SD	86	6	25	B6	弧状	N-20° -E	3.61	0.35~0.33	0.06	-	-	-
SD	87	6	25	B6	半円状	N-22° -E	3.44	0.38~0.40	0.04	-	-	-
SD	88	6	25	B6	弧状	N-23° -E	3.55	0.25~0.37	0.09	-	-	-
SD	89	6	25	B6,B7	弧状	N-25° -E	3.07	0.29~0.32	0.06	-	-	-
SD	90	6	25	B7	V字状	N-26° -E	0.95	0.25~0.30	0.07	-	-	-
SD	91	6	25	B7	弧状	N-21° -E	2.40	0.22~0.32	0.03	-	-	-
SD	92	6	25	B7	半円状	N-23° -E	2.18	0.35~0.43	0.07	-	-	-
SD	93	6	25	B7	弧状	N-20° -E	1.78	0.31~0.36	0.03	-	-	-
SD	94	6	25	B8	弧状	N-18° -E	1.80	0.29~0.28	0.05	-	-	-
SD	95	6	25	B8	弧状	N-12° -E	1.68	0.27~0.35	0.09	-	-	-
SD	96	6	25	B8	弧状	N-19° -E	1.58	0.20~0.23	0.10	-	-	-
SD	97	6	25	B8	弧状	N-19° -E	1.51	0.21~0.30	0.08	-	-	-

ピット(P)観察表

凡例: ()は残存箇

層子分類

A:灰色(10Y4/1)粘土-中世以降

D:暗灰色(N3/)粘土-古墳時代中期2

B:黒褐色(2.5Y3/1)粘土-古代

E:灰色(N5/)粘土-古墳時代中期1

C:暗黃色(2.5Y5/2)粘土-古墳時代中期

F:灰白色(N7/)粘土-地山, 振り方覆土

種別	遺構番号	図面	断面	方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面高(m)	覆土分類	主要な切り合い	既往性地	
P	138	-	A6-23-B6-3	楕円形	弧状	N=17°-W	0.45	0.31	0.12	5.67	C	
P	139	-	B6-3,8	円形	漏斗状	N=6°-W	0.47	0.47	0.26	5.50	B	
P	140	-	B6-7	円形	弧状	N=6°-W	0.33	0.31	0.12	5.63	B	
P	141	-	B6-6,7	円形	弧状	N=59°-W	0.48	0.45	0.12	5.63	C	
P	142	-	A6-22	楕円形	台形状	N=79°-W	0.40	0.27	0.17	5.55	B	
P	143	-	A6-22-B6-2	楕円形	台形状	N=49°-E	0.34	0.27	0.12	5.62	C	
P	144	-	B6-1	楕円形	台形状	N=31°-E	0.26	0.20	0.12	5.63	B	
P	145	-	B6-1	円形	半円状	N=56°-W	0.40	0.39	0.31	5.46	C	
P	146	-	B6-1	楕円形	漏斗状	N=68°-W	0.33	0.20	0.29	5.58	B	
P	147	-	B6-6	楕円形	U字状	N=27°-W	0.26	0.22	0.25	5.53	D	
P	148	-	B6-1	円形	U字状	N=41°-W	0.34	0.31	0.17	5.61	B	
P	149	-	B6-3	円形	半円状	N=12°-E	0.39	0.38	0.17	5.61	C	
P	150	-	B6-7	楕円形	漏斗状	N=26°-W	0.33	0.18	0.46	5.26	D	
P	151	-	B6-7	楕円形	漏斗状	N=79°-E	0.34	0.27	0.41	5.31	B	
P	152	-	21	B6-2	楕円形	台形状	N=79°-E	0.44	0.39	0.21	5.53	C
P	153	-	B6-3	円形	台形状	N=12°-E	0.29	0.28	0.17	5.64	D	
P	154	-	B5-10	円形	V字状	N=1°-E	0.24	0.21	0.29	5.56	D	
P	155	-	B5-10	楕円形	弧状	N=28°-E	0.35	0.23	0.25	5.54	C	
P	156	9	B6-4	楕円形	漏斗状	N=19°-E	0.41	0.33	0.27	5.53	D	
P	157	-	B6-4	円形	台形状	N=76°-E	0.41	0.38	0.12	5.62	C	
P	158	-	A6-21-B6-1	円形	漏斗状	N=81°-W	0.30	0.27	0.29	5.43	D	
P	159	-	B6-2	楕円形	半円状	N=15°-E	0.30	0.30	0.12	5.62	C	
P	160	-	B6-3	円形	漏斗状	N=15°-E	0.30	0.29	0.17	5.59	B	
P	161	-	B6-8,9	円形	半円状	N=1°-E	0.39	0.39	0.22	5.55	B	
P	162	-	A6-21	楕円形	半円状	N=35°-E	0.27	0.22	0.14	5.58	C	
P	163	-	A6-21	楕円形	半円状	N=22°-E	0.24	0.16	0.14	5.60	C	
P	164	-	B6-5	円形	台形状	N=4°-E	0.29	0.26	0.09	5.69	C	
P	165	-	B6-5	楕円形	漏斗状	N=74°-W	0.33	0.28	0.13	5.67	B	
P	166	-	B6-4,5	円形	半円状	N=8°-W	0.22	0.21	0.12	5.67	C	
P	167	-	B6-4	楕円形	漏斗状	N=28°-E	0.23	0.19	0.32	5.44	C	
P	168	-	B6-3	円形	U字状	N=18°-E	0.41	0.41	0.15	5.64	C	
P	169	-	B6-3	円形	U字状	N=28°-E	0.29	0.29	0.16	5.57	C	
P	170	-	B6-4,9	円形	U字状	N=17°-E	0.30	0.29	0.34	5.45	C	
P	171	-	B6-4	円形	台形状	N=38°-E	0.27	0.26	0.18	5.63	C	
P	172	-	B6-4,9	楕円形	弧状	N=62°-W	0.35	0.31	0.05	5.72	B	
P	173	-	A6-22	楕円形	漏斗状	N=79°-W	0.41	0.22	0.15	5.57	C	
P	174	-	B6-3,4	楕円形	U字状	N=64°-W	0.32	0.26	0.24	5.55	B	
P	175	-	B6-4	円形	U字状	N=4°-W	0.41	0.40	0.08	5.72	B	
P	176	-	B6-5,10	円形	半円状	N=45°-W	0.19	0.17	0.08	5.68	B	
P	177	-	B6-7	楕円形	弧状	N=11°-E	0.33	0.34	0.09	5.66	C	
P	178	-	B6-1	楕円形	半円状	N=27°-E	0.25	0.19	0.11	5.63	D	
P	179	-	B6-5	楕円形	漏斗状	N=11°-E	0.34	0.29	0.22	5.55	B	
P	180	-	B7-6	円形	U字状	N=36°-E	0.20	0.18	0.17	5.59	B	
P	181	-	A6-23-B6-3	楕円形	U字状	N=77°-W	0.38	0.25	0.11	5.60	B	
P	182	-	B6-8,9	円形	U字状	N=1°-E	0.25	0.23	0.22	5.54	D	
P	183	-	B7-6	円形	U字状	N=8°-W	0.19	0.17	0.20	5.55	D	
P	184	-	B7-6	楕円形	V字状	N=61°-E	0.18	0.14	0.08	5.67	C	
P	185	-	B7-6	楕円形	V字状	N=24°-W	0.24	0.18	0.14	5.61	B	
P	186	-	B6-3	楕円形	U字状	N=53°-W	0.26	0.20	0.15	5.64	C	
P	187	-	B6-10	楕円形	U字状	N=43°-W	0.29	0.21	0.17	5.58	B	
P	188	-	B6-10	円形	台形状	N=1°-E	0.28	0.28	0.16	5.57	C	
P	189	-	B6-5	円形	半円状	N=60°-W	0.34	0.31	0.11	5.66	C	
P	190	-	B7-2,7	楕円形	半円状	N=68°-W	0.51	0.37	0.11	5.67	A	
P	192	-	A5-25	楕円形	漏斗状	N=1°-W	0.36	0.25	0.17	5.54	C	
P	193	-	B6-1	楕円形	台形状	N=37°-W	0.46	0.39	0.16	5.59	C	
P	194	10	21	B6-3	楕円形	台形状	N=2°-E	0.48	0.37	0.26	5.49	E
P	195	-	B6-2	円形	漏斗状	N=38°-E	0.36	0.34	0.10	5.64	B	
P	196	-	A6-22-B6-2	楕円形	漏斗状	N=46°-E	0.34	0.25	0.22	5.52	B	
P	197	-	A6-22-B6-2	円形	台形状	N=21°-E	0.33	0.30	0.19	5.56	C	
P	198	-	B6-3,8	楕円形	半円状	N=7°-E	0.43	0.33	0.10	5.66	C	
P	199	-	B6-3	楕円形	台形状	N=5°-W	0.24	0.20	0.22	5.56	D	
P	201	-	A6-22	楕円形	半円状	N=31°-W	0.62	0.55	0.15	5.60	C	

ピット(P)観察表

凡例:()は複数箇

地土分類

A:灰色(10Y4/1)粘土—中世以降

D:暗灰色(N3/)粘土—古墳時代中期2

B:黒褐色(2.5Y3/1)粘土—古代

E:灰色(N5/)粘土—古墳時代中期1

C:暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土—古墳時代中期3

F:灰白色(N7/)粘土—地山, 剥り方覆土

種別	遺構番号	図面回数	写真回数	位 置	平面形	断面形状	方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	W.R.M.(m)	覆土分類	主要な切り合い	組立位置
P	271	—	—	A6-22	橢円形	台形状	N=40°-W	0.37	0.27	0.20	5.54	B	—	—
P	272	—	—	A8-22・B6-2	橢円形	台形状	N=56°-W	0.36	0.30	0.14	5.60	C	—	—
P	273	—	—	B7-10	橢円形	U字状	N=11°-W	0.30	0.26	0.36	5.41	B	—	—
P	274	—	—	B7-10	円形	漏斗状	N=23°-W	0.37	0.34	0.27	5.50	D	—	—
P	275	—	—	B7-10	円形	U字状	N=44°-E	0.19	0.18	0.22	5.54	D	—	—
P	276	—	—	B5-10	橢円形	台形状	N=87°-W	0.29	0.21	0.11	5.59	B	—	—
P	277	—	—	B7-15	橢円形	弧状	N=18°-W	0.35	0.31	0.07	5.70	C	—	SB007
P	278	—	—	B7-15	橢円形	弧状	N=23°-E	0.31	0.27	0.11	5.67	C	—	—
P	279	—	—	B7-9	円形	U字状	N=57°-W	0.27	0.25	0.39	5.36	C	—	—

土器・陶磁器 観察表

凡例: 指定は以 下のとおりとする
口=口縁部、底=底部、体=体部、底=底部、外=外面、内=内面、外=外面
〔 〕は指定値

器種	年	出土地点	遺物種類	器種	分類	法	量	色	調	質	内面	底面	付資料	
素面 手縫	14 26 11-10	S100	1箱	土師器	甕	—	16.2	—	—	口:5.5cm 底:5.5cm 身:16.0cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—
2 14 26 A1-10	P10	1箱	土師器	高杯	—	16.6	—	—	底:5.5cm 身:13.2cm	良	6.6.7cm.φ	石、灰、砂	—	
3 14 26 A1-10	P21	1箱	土師器	高杯	—	—	—	—	底:5.5cm 身:13.2cm	良	6.6.7cm.φ	脚:ヨコナデ 脚:ミガキ	—	
4 14 26 A1-10	S63	1箱	土師器	高杯	—	—	—	—	底:5.5cm 身:13.2cm	普通	6.6.7cm.φ	—	—	
5 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	16.9	—	—	口:5.5cm 底:5.5cm 身:15.9cm	普通	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
6 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	15.9	—	—	底:5.5cm 身:15.0cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
7 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	17.0	—	—	底:5.5cm 身:13.2cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
8 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	13.2	—	—	底:5.5cm 身:13.2cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
9 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	19.2	—	—	底:5.5cm 身:19.2cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
10 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	甕	—	15.2	—	—	底:5.5cm 身:15.2cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
11 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	高杯	—	—	—	—	底:5.5cm 身:15.2cm	普通	6.6.7cm.φ	脚:ミガキ	—	
12 14 26 A1-10	S85	2箱	土師器	高杯	—	—	—	—	底:5.5cm 身:15.2cm	良	6.6.7cm.φ	—	—	
13 14 26 A1-10	S85	1箱	床滑	甕	—	—	—	—	底:5.5cm 身:16.3cm	良	白、黒	体:ヨコタヌキ 底:ヨコタヌキ	—	
14 14 26 A1-10	P210	1箱	土師器	甕	—	28.5	—	—	底:5.5cm 身:28.5cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	ハゲヌク	
15 14 26 A1-10	—	1箱	土師器	甕	—	16.0	—	—	底:5.5cm 身:16.0cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
16 14 26 A1-10	—	1箱	土師器	甕	—	17.8	—	—	底:5.5cm 身:17.8cm	良	6.6.7cm.φ	口:ハナタメヨコナデ 口:ミガキ	—	
17 14 27 10e-1	(S081)	1箱	土師器	甕	—	17.1	—	—	底:5.5cm 身:17.1cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 口:ミガキ	—	
18 15 27 A1-6	—	1箱	土師器	甕	—	14.8	—	—	底:5.5cm 身:14.8cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 口:ミガキ	—	
19 15 27 E-10	—	1箱	土師器	甕	—	16.2	—	—	底:5.5cm 身:16.2cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—	
20 15 27 A1-10	—	1箱	土師器	甕	—	16.1	—	—	底:5.5cm 身:16.1cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—	
21 15 27 A1-10	—	1箱	土師器	甕	—	17.8	—	—	底:5.5cm 身:17.8cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—	
22 14 27 A1-9	—	1箱	土師器	甕	—	17.7	—	—	底:5.5cm 身:17.7cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—	
23 15 27 A1-9	—	1箱	土師器	高杯	—	21.5	—	—	底:5.5cm 身:21.5cm	良	6.6.7cm.φ	口:ヨコナデ 底:ミガキ	—	
24 15 27 A1-9	—	1箱	無地紋	無台杯	—	11.9	—	—	底:5.5cm 身:11.9cm	良	白	口:クロコナデ 口:ミガキ	—	
25 15 27 A1-9	—	1箱	無地紋	有台杯	—	7.2	—	—	底:5.5cm 身:7.2cm	良	白、青	口:クロコナデ 口:ミガキ	—	
26 15 27 A1-7	—	1箱	無地紋	杯蓋	—	12.1	—	—	底:5.5cm 身:12.1cm	良	白	口:クロコナデ 口:ミガキ	—	
27 15 27 A1-7	—	1箱	無地紋	甕	—	—	—	—	底:5.5cm 身:12.1cm	良	白	体:ホコ子タヌキ 底:ヨコタヌキ	—	

石器・石製品 観察表

報告番号	回収番号	写真回数	出土 地 点	遺構	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
28	15	27	B7-10	SI100③	1層	白玉	滑石	0.38	0.38	0.25	0.10	
29	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉	滑石	0.50	0.50	0.50	0.10	
30	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.55	0.40	0.30	0.10	
31	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.40	0.65	0.30	0.10	
32	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.71	0.35	0.32	0.20	
33	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	0.50	0.30	0.30	0.10	
34	15	27	B7-10	SI100-SK③	4層	白玉未成品	滑石	0.60	0.35	0.20	0.10	
35	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.75	0.30	0.29	0.10	
36	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	1.01	0.57	0.28	0.30	
37	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	0.80	0.70	0.31	0.30	
38	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	0.90	0.70	0.30	0.30	
39	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	1.00	0.65	0.39	0.30	
40	15	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	1.00	0.72	0.31	0.30	
41	15	27	B7-10	SI100-SK①	4層	白玉未成品	滑石	1.05	1.00	0.31	0.40	
42	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	1.32	1.01	0.30	0.50	
43	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.71	0.45	0.39	0.20	
44	15	27	B7-10	SI100	1層	白玉未成品	滑石	0.90	0.55	0.29	0.20	
45	15	27	B7-10	SI100②	1層	白玉未成品	滑石	1.15	0.58	0.25	0.30	
46	15	27	B7-10	SI100②	1層	白玉未成品	滑石	1.15	1.00	0.31	0.40	
47	15	27	B7-10	SI100-SK④	7~10層	白玉未成品	滑石	1.15	0.75	0.26	0.30	
48	15	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	0.95	0.80	0.28	0.40	
49	15	27	B7-9	SI100④	1層	白玉未成品	滑石	1.01	0.81	0.35	0.40	
50	15	27	B7-10	SI100-SK④	7~10層	白玉未成品	滑石	1.00	0.95	0.59	0.50	
51	15	27	B7-9	S 100④	1層	白玉未成品	滑石	0.90	0.60	0.39	0.30	
52	15	27	B7-10	SI100-SK④	7~10層	白玉未成品	滑石	1.00	0.92	0.55	0.60	
53	15	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	1.18	1.20	0.41	0.90	
54	15	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	1.06	0.88	0.21	0.40	
55	15	27	B7-15	SI100③	1層	白玉未成品	滑石	0.96	0.99	0.22	0.40	
56	15	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	0.70	0.60	0.28	0.20	
57	16	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	1.55	1.21	0.45	0.90	
58	16	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	1.21	0.92	0.25	0.40	
59	16	27	B7-10	SI100①	1層	白玉未成品	滑石	0.90	0.65	0.40	0.50	
60	16	27	B7-10	SI100②	1層	白玉未成品	滑石	2.19	0.98	0.50	1.10	
61	16	27	B7-10	SI100-SK①	7~10層	白玉未成品	滑石	1.90	1.21	0.49	1.00	
62	16	27	B7-15	SI100③	1層	勾玉未成品	滑石	2.45	1.71	0.68	3.50	
63	16	27	B7-10	SI100-SK①	4層	勾玉未成品	滑石	2.30	1.50	0.60	2.20	
64	16	28	B7-10	SI100	III層	礫石	閃綠岩	4.61	4.01	3.95	93.80	
65	16	28	B7-10	SI100-SK①	4層	礫石	砂岩	8.65	8.05	2.00	117.00	内層紙石
66	16	28	B6-7	—	III層	礫石	砂岩	7.25	3.60	3.10	97.90	
67	16	28	A1-15	—	III層	礫石	砂岩	7.60	5.10	4.90	167.50	横状紙石

木製品 観察表

報告番号	回収番号	写真回数	出土 地 点	遺構	層位	器種	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
68	16	28	B5-10	—	II層	下駄	延目	17.15	12.21	9.93	

角田遺跡 位置図

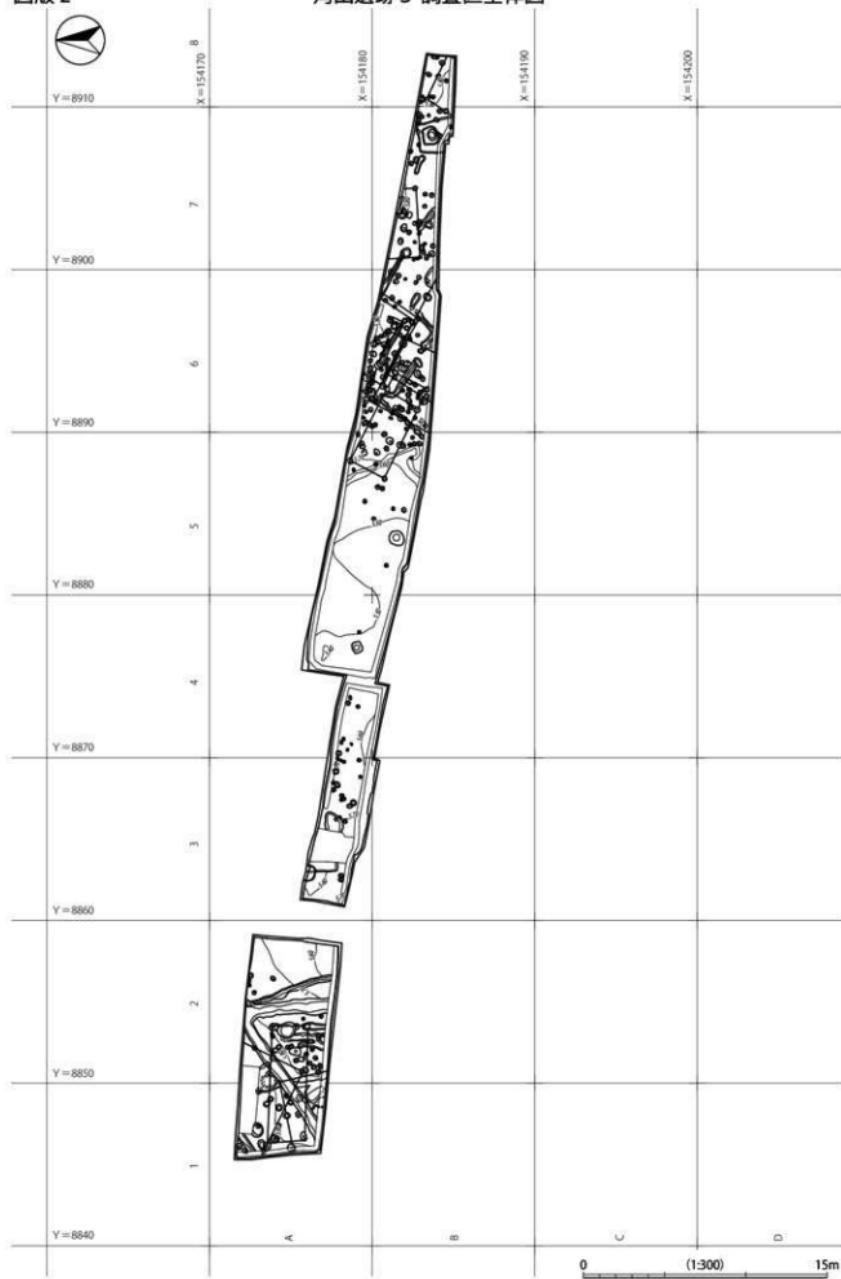
図版 1



【原図】柏崎全図その2・4 (1:10,000) 柏崎市 1996年調製

図版2

角田遺跡5 調査区全体図

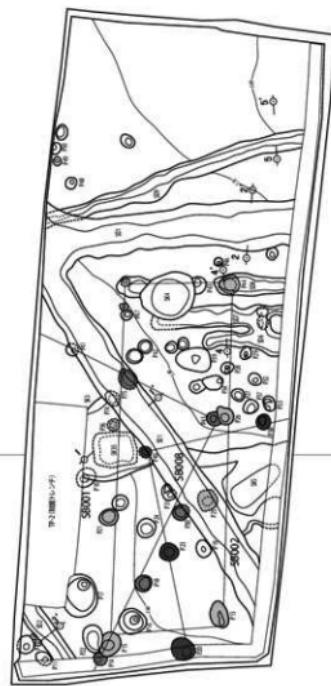


角田遺跡5 調査区分割図1

版3

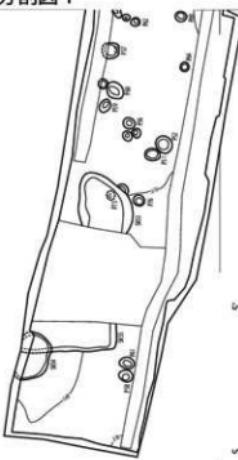


1 2 3



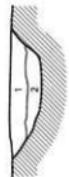
SD 6・7・8
6.000m ←

SD6
1. 黄褐色粘土 (0/0.41) 粒性やや強い、しりりやや弱い、φ~2mmの炭化物を少量含む。
SD7
1. 黄褐色粘土 (0/0.41) 粒性やや強い、しりりやや弱い、φ~1mmの炭化物を微量含む。



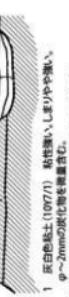
SD 9
6.000m ←

1. 黄褐色粘土 (0/0.41) 粒性やや強い、
φ~2mmの炭化物を少量含む。
N層 フロックを少量含む。



SD 2
6.000m ←

1. 黄褐色粘土 (0/0.71) 粒性強い、しりりやや弱い、
φ~2mmの炭化物を多量含む。
2. 黄白色土 (0/0.41) 粒性やや強い、しりりやや弱い、
φ~2mmの炭化物を多量含む。N層 高温鉄器を含む。



SD 1
5.000m ←

1. 黄褐色粘土 (0/0.41) 粒性やや強い、
φ~2mmの炭化物を少量含む。
N層 フロックを少量含む。



断面図 (1:40)
平地図 (1:100)

図版4

角田遺跡5 調査区分割図2



平地圖(1:100)
0 50m

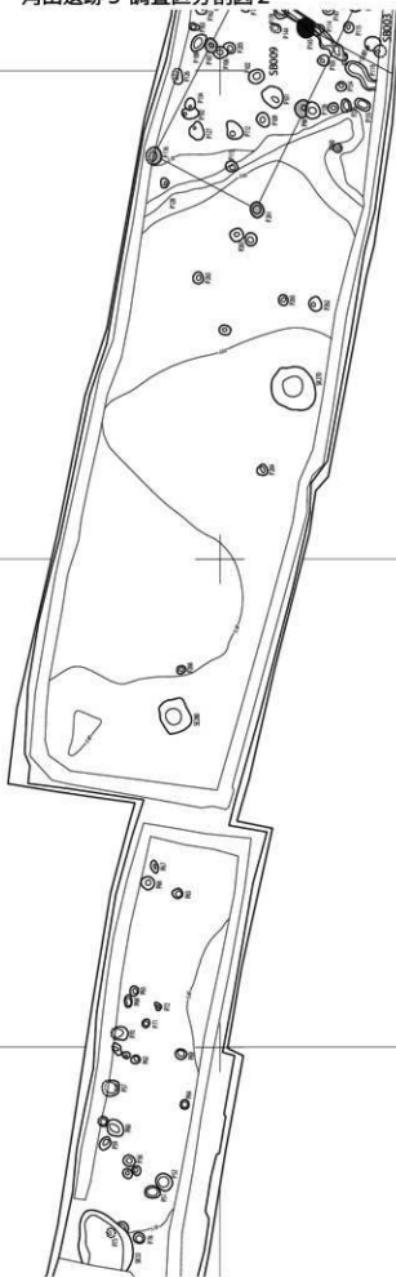
5

4

3

A

B



角田遺跡5 調査区分割図3

図版5

平測図(1:100) 5m



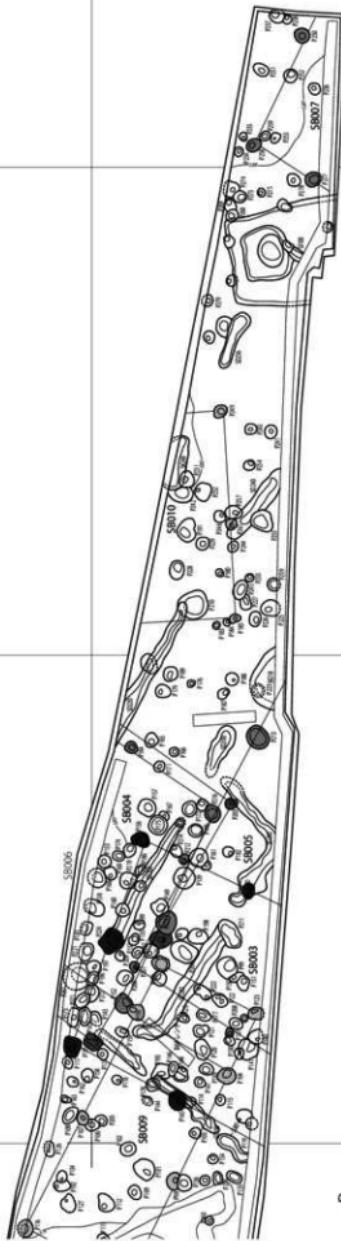
7

6

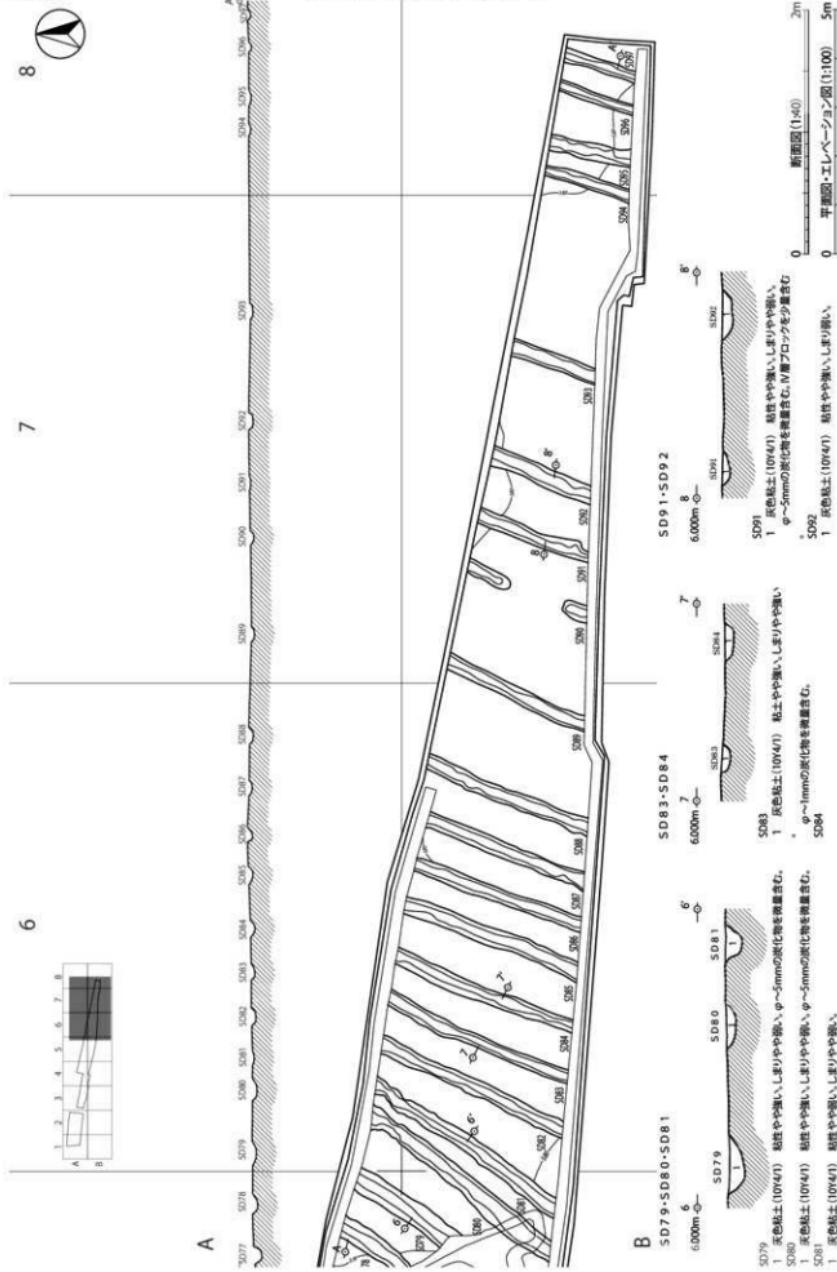


A

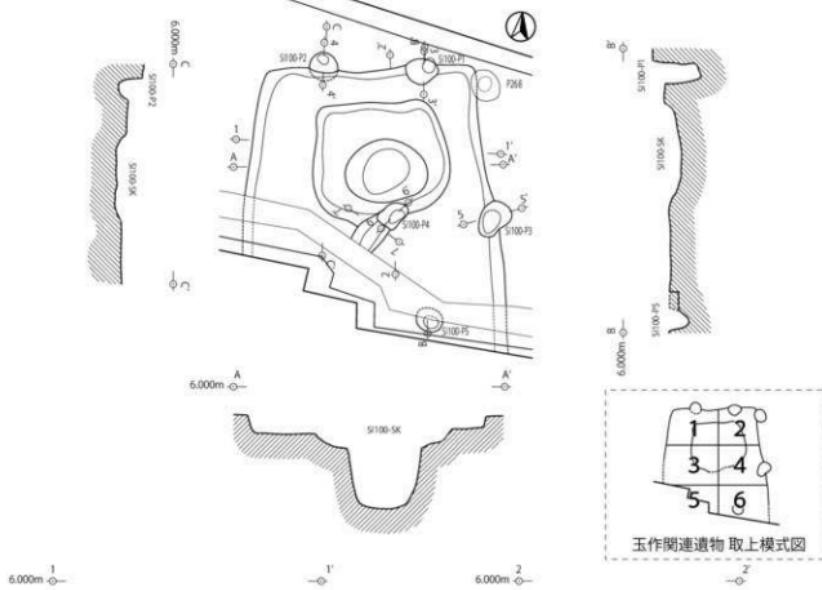
B



図版6

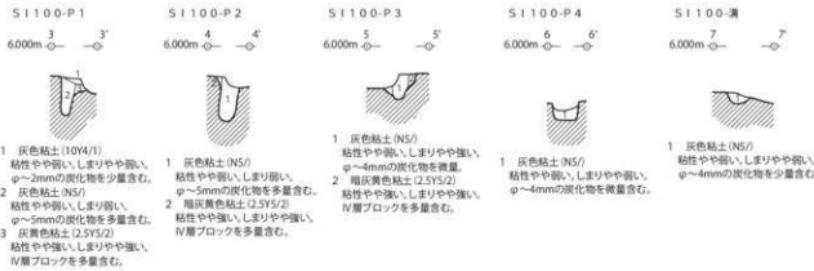


角田遺跡 5 遺構個別図 1 積穴建物



- 灰色粘土 (10Y4/1) 粘性強い、しまりやや弱い、 $\phi \sim 2mm$ の炭化物を多量含む。
- 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性やや強く、しまり弱い、IV層ブロックを少量含む。
- 灰色粘土 (NS/1) 粘性やや弱く、しまり弱く、 $\phi \sim 5mm$ の炭化物を多量含む。
- 暗灰黄色粘土 (N3/1) 粘性強く、しまりやや強く、 $\phi \sim 3mm$ の炭化物を少量含む。

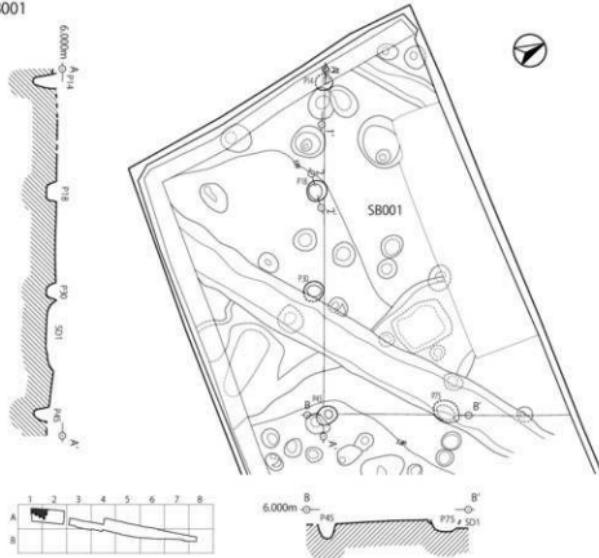
- 6 緑灰色粘土 (5G6/1) 粘性やや強く、しまりやや弱く、 $\phi \sim 8mm$ の炭化物を少量含む。
- 7 緑灰色粘土 (5G6/1) 粘性やや強く、しまり弱く、 $\phi \sim 2mm$ の炭化物を多量含む。
- 8 緑灰色粘土 (10G6/1) 粘性やや強く、しまり弱く、 $\phi \sim 5mm$ の炭化物を多量含む。



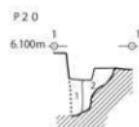
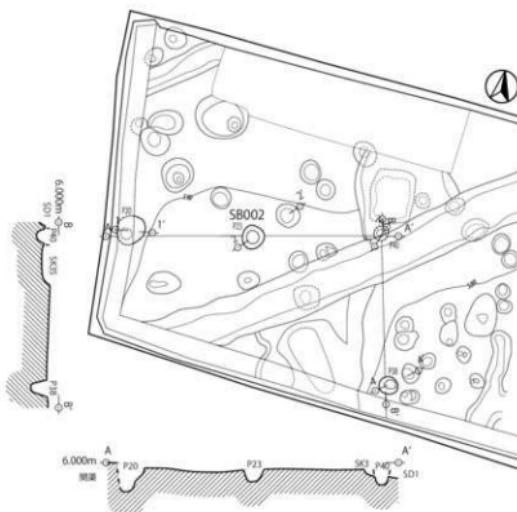
図版8

SB001

角田遺跡5 遺構個別図2 掘立柱建物(1)



SB002



P 4.0
6.000m
3 3'



1 噴灰黄色粘土 (2.5Y5/2)
粘性やや強い。しまり弱い。
 $\varphi \sim 2\text{mm}$ の炭化物を少量含む。

P 3.8
6.000m
4 4'

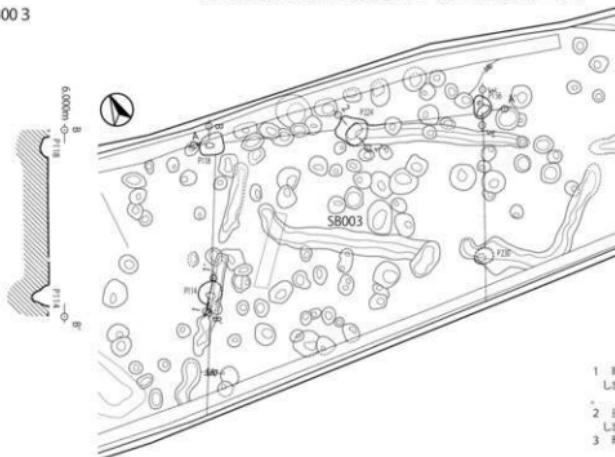


1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1)
粘性強い。しまり弱い。 $\varphi \sim 1\text{mm}$ の炭化物を少量含む

0 断面図 (1:40) 2m
0 平面図・エレベーション図 (1:80) 4m

角田遺跡5 遺構個別図3 掘立柱建物（2）

SB003



図版9

P 1 1 4
6.000m 1 1'



1 海灰色粘土(N3)
粘性やや弱い、しまりやや弱い。
 $\varphi \sim 2mm$ の炭化物を少量含む。

2 灰色粘土(NS)
粘性やや弱い、しまり弱い。

P 2 2 4

6.000m 2 2'



1 海灰色粘土(N3)
粘性やや弱い、
しまり強い。 $\varphi \sim 2mm$ の炭化物を微量含む。

2 沼沢粘土(NS)
粘性やや弱い、
しまりやや弱い。IV層ブロックを多量含む。

3 海灰黄色粘土(2.5YS/2)
粘性やや弱い。

P 1 5 6

6.000m 3 3'



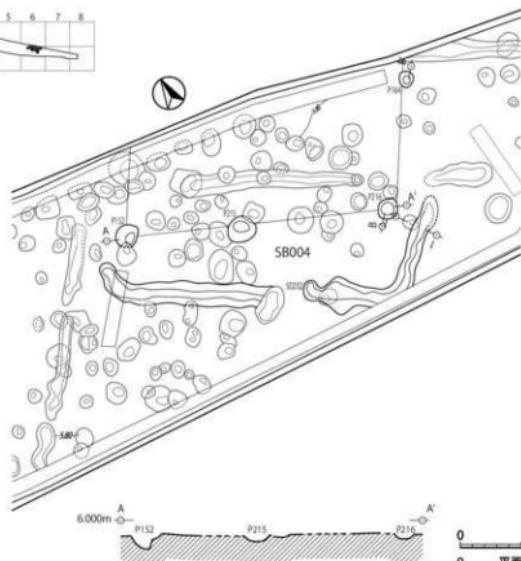
1 海灰黄色粘土(2.5YS)
粘性やや弱い、
しまりやや弱い。 $\varphi \sim 4mm$ の炭化物を少量含む。

2 海灰黄色粘土(2.5YS)
粘性やや弱い、
しまりやや弱い。IV層ブロックを多量含む。

3 海灰黄色粘土(2.5YS/2)
粘性やや弱い、しまりやや弱い。

SB004

A-A' B-B'



S D 2 2
6.000m 1 1'

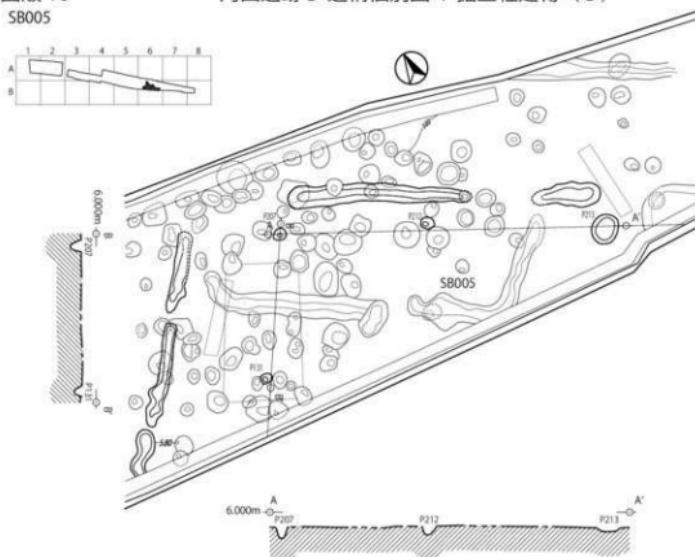


1 海灰黄色粘土(2.5YS/2)
粘性やや弱い、しまりやや弱い。
 $\varphi \sim 2mm$ の炭化物を少量含む。

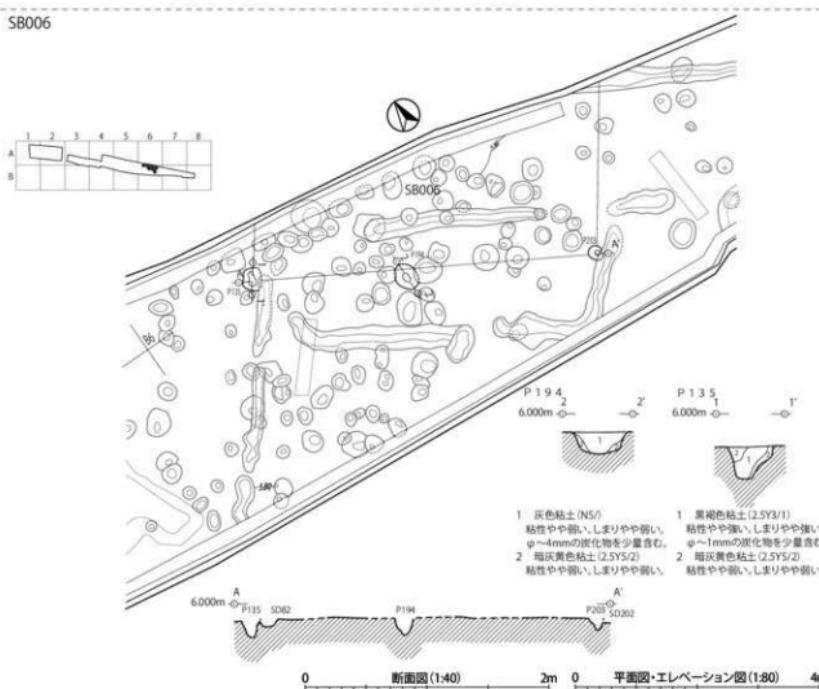
断面図(1:40) 2m
0 平面図・エレベーション図(1:80) 4m
0

図版 10
SB005

角田遺跡 5 遺構個別図 4 掘立柱建物 (3)



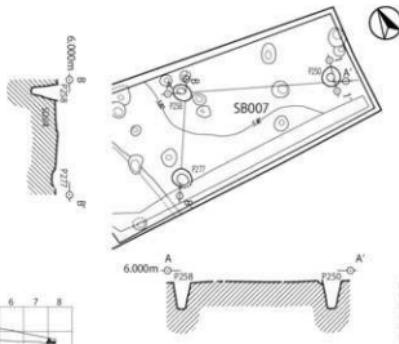
SB006



角田遺跡5 遺構個別図5 掘立柱建物（4）

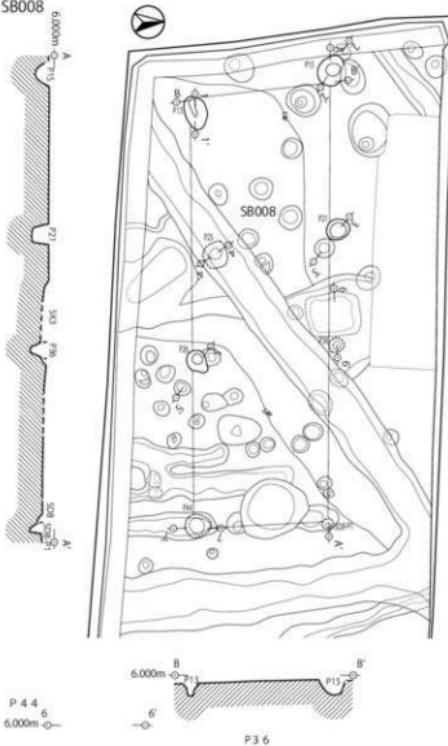
図版 11

SB007



- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1)
粘性やや強く、しまり良い。
 φ ~3mmの炭化物を少量含む。
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2)
粘性やや弱く、しまりやや弱い。
IV層ブロックを多量含む。

SB008



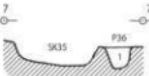
P 4 4



- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性強い、しまり弱い。
 φ ~4mmの炭化物を少量含む。

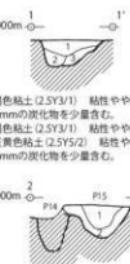
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性強い、しまり弱い。
 φ ~3mmの炭化物を微量含む。

P 3 6



- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりやや弱い。

P 1 3



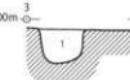
- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。
 φ ~2mmの炭化物を少量含む。
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性やや強い、しまりやや弱い。
- 3 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性やや弱い、しまりやや強い。
 φ ~2mmの炭化物を少量含む。

P 1 5



- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。
 φ ~10mmの炭化物を多量含む。
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。

P 2 1



P 2 5

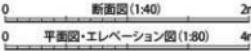


- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性強い、しまり弱い。
 φ ~8mmの炭化物を多量含む。
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性強い、しまり弱い。

P 2 6



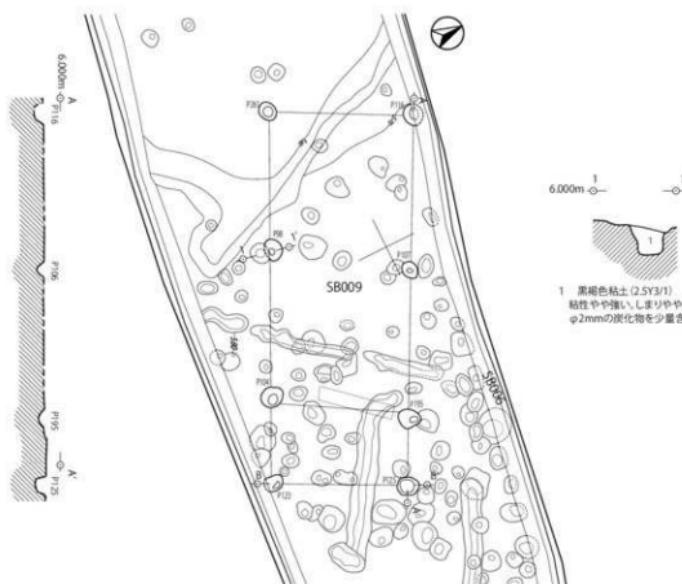
- 1 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘性がやや強い、しまりやや弱い。
 φ ~3mmの炭化物を多量含む。
- 2 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 粘性がやや弱い、しまりやや弱い。
 φ ~1mmの炭化物を少量含む。



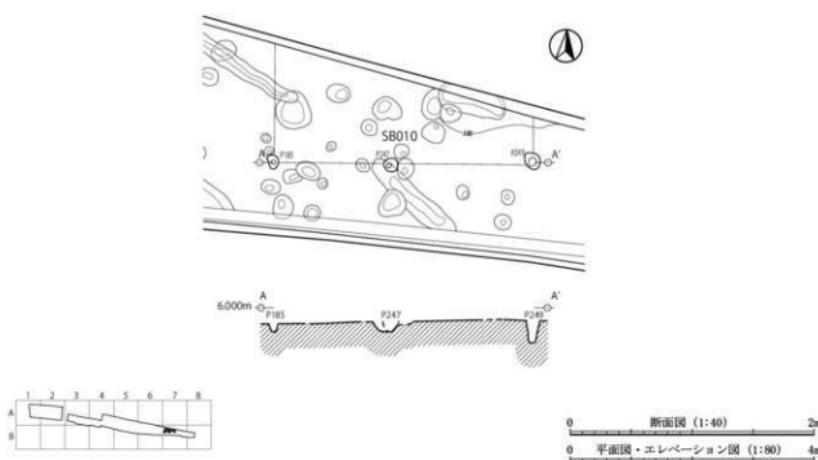
図版 12

SB009

角田遺跡 5 遺構個別図 6 掘立柱建物 (5)



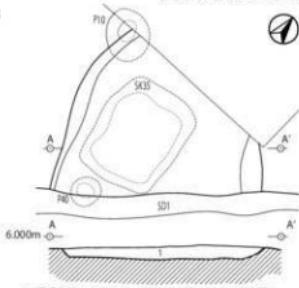
SB010



角田遺跡5 遺構個別図7 土坑・井戸・ピット

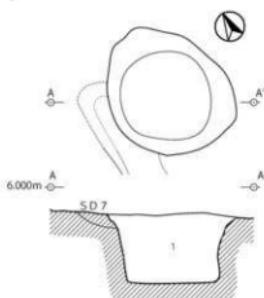
図版13

SK 3



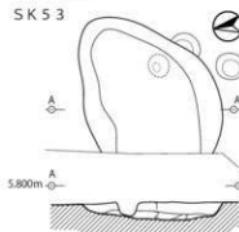
1 黒褐色粘土 (2SY3/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。

SK 4



1 灰白色粘土 (10Y7/1) 粘性に非常に強い、しまり弱い。

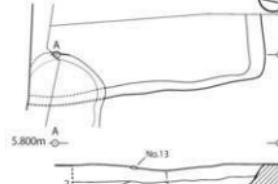
SK 53



1 黒褐色粘土 (2SY3/1) 粘性強い、しまりやや弱い。
φ~4mmの炭化物を少量含む。IV層ブロックを少量含む。

2 灰白色粘土 (N7/1) 粘性強い、しまり弱い。

SK 55

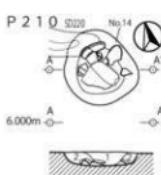


1 灰色粘土 (5SY3/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。
φ~5mmの炭化物を少量含む。

2 灰色粘土 (5Y4/1) 粘性やや弱い、しまり弱い。
3 灰色粘土 (10Y4/1) 粘性やや弱い、しまり弱い。

φ~5mmの炭化物を少量含む。

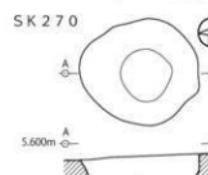
P 210



1 細灰褐色粘土 (N3/1)
粘性やや強い、しまりやや弱い。
φ~5mmの炭化物を微量含む。

2 灰色粘土 (N5/1)
粘性強い、しまり弱い。
φ~3mmの炭化物を少量含む。

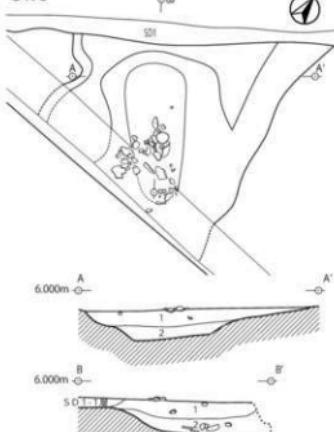
SK 270



1 灰色粘土 (10Y4/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。
細灰褐色粘土 (N3/1) ブロック、灰色粘土ブロックを非常に多く含む。

2 灰白色粘土 (N7/1) 粘性強い、しまり弱い。
細灰褐色粘土 (N5/1) 粘性強い、しまり弱い。
φ~3mmの炭化物を少量含む。

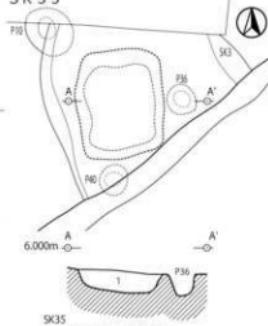
SK 5



1 黒褐色粘土 (2SY3/1) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。
φ~5mmの炭化物を多量含む。IV層ブロックを多量含む。

2 細灰黄色粘土 (2SY5/2) 粘性やや強い、しまりやや強い。
φ~7mmの炭化物を少量含む。古墳時代の土器器を多量含む。

SK 35

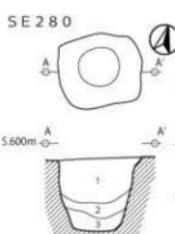


SK35

1 細灰黄色粘土 (2SY5/2)
粘性やや強い、しまりやや弱い。
φ~10mmの炭化物を少量含む。

IV層ブロックを多量含む。

SE 280



1 灰色粘土 (10Y4/1)
粘性やや強い、しまりやや弱い。
φ~10mmの炭化物を多量含む。

IV層ブロックを多量含む。

2 黒褐色粘土 (2SY3/1)
粘性強い、しまり弱い。
φ~20mmの炭化物を非常に多量含む。

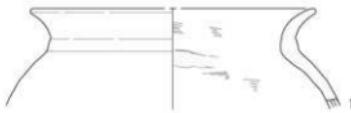
木質を多量含む。

3 細灰褐色粘土 (N3/1)

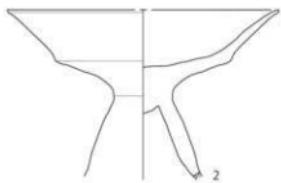
粘性強い、しまり弱い。
φ~3mmの炭化物を少量含む。

0 (1:40) 2m

SI100



SB002-P40



SB008-P21



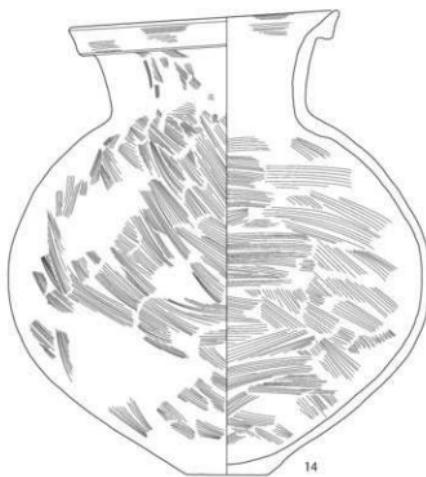
SK3



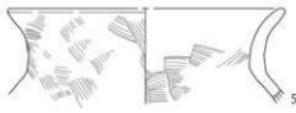
SK55



P210



SK5



遺物包含層（III層）(1)

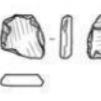
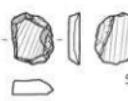
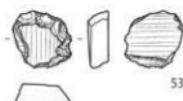
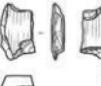
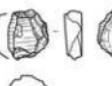
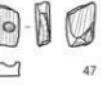
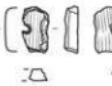
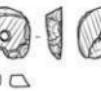
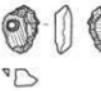
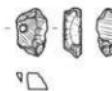
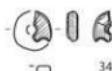
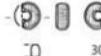


0 (S=1:3) 15cm

遺物包含層(III層)(2)



SI100(1)

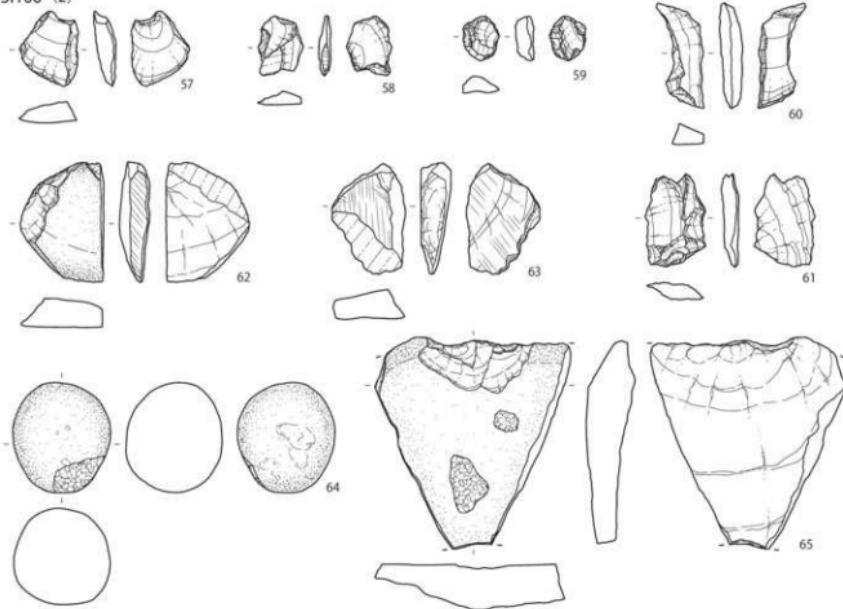


0 (28~56 S=1:1) 5cm
0 (19~27 S=1:3) 15cm

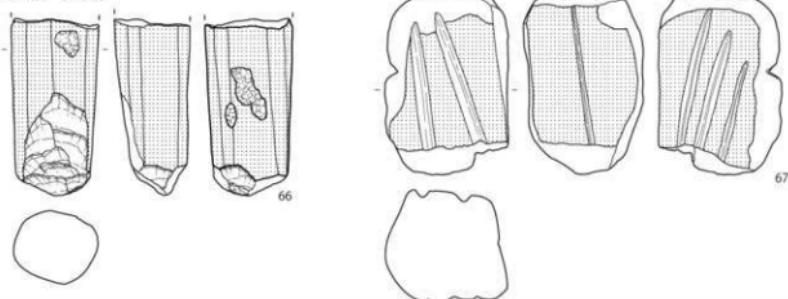
図版 16

角田遺跡 5 出土遺物 3 石器 (2)・木製品

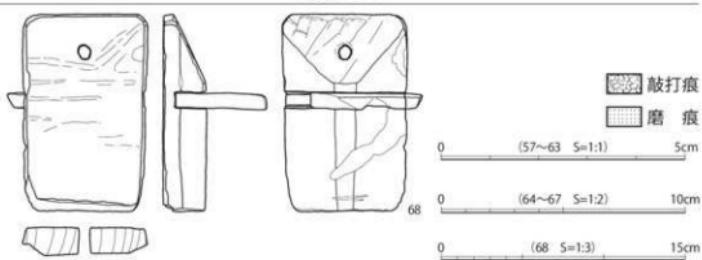
SI100 (2)



遺物包含層 (III層)



遺物包含層 (II層)





図版 18

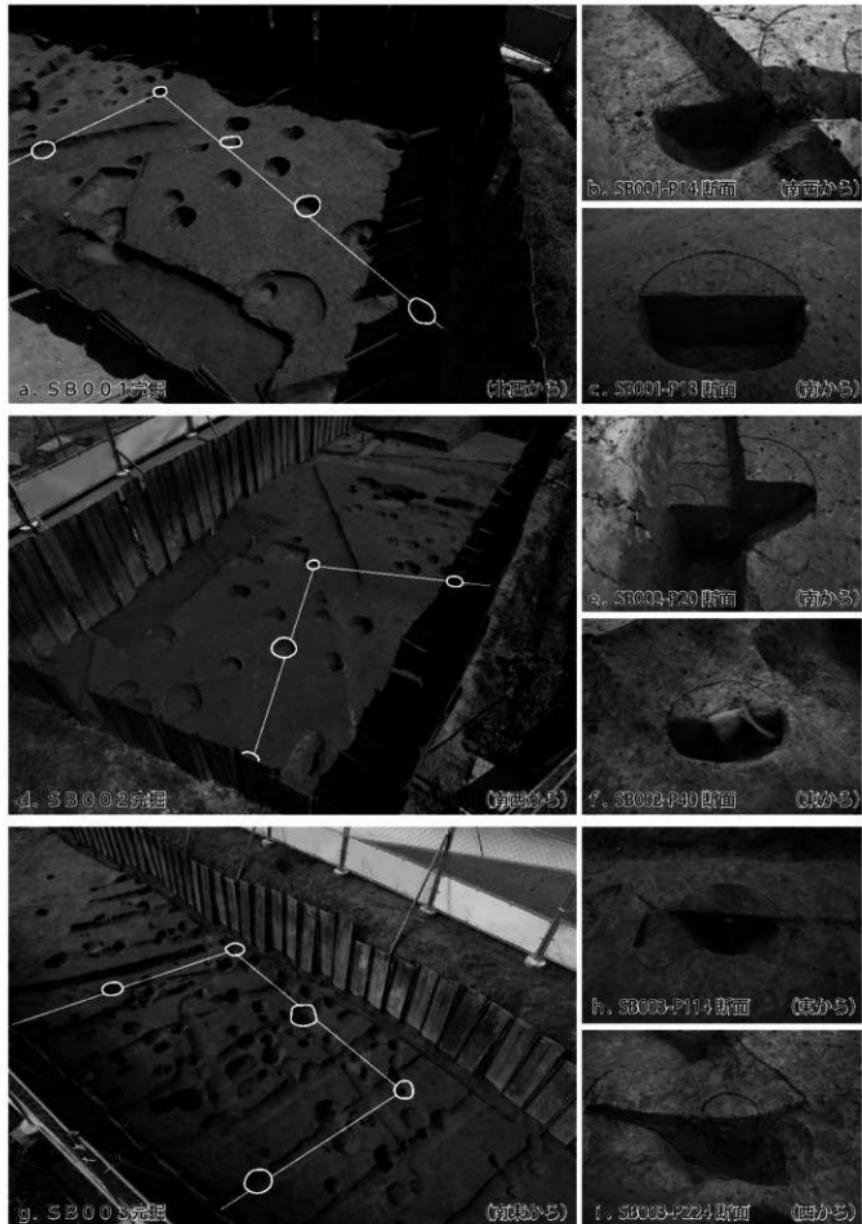
角田遺跡 5 調査区 2





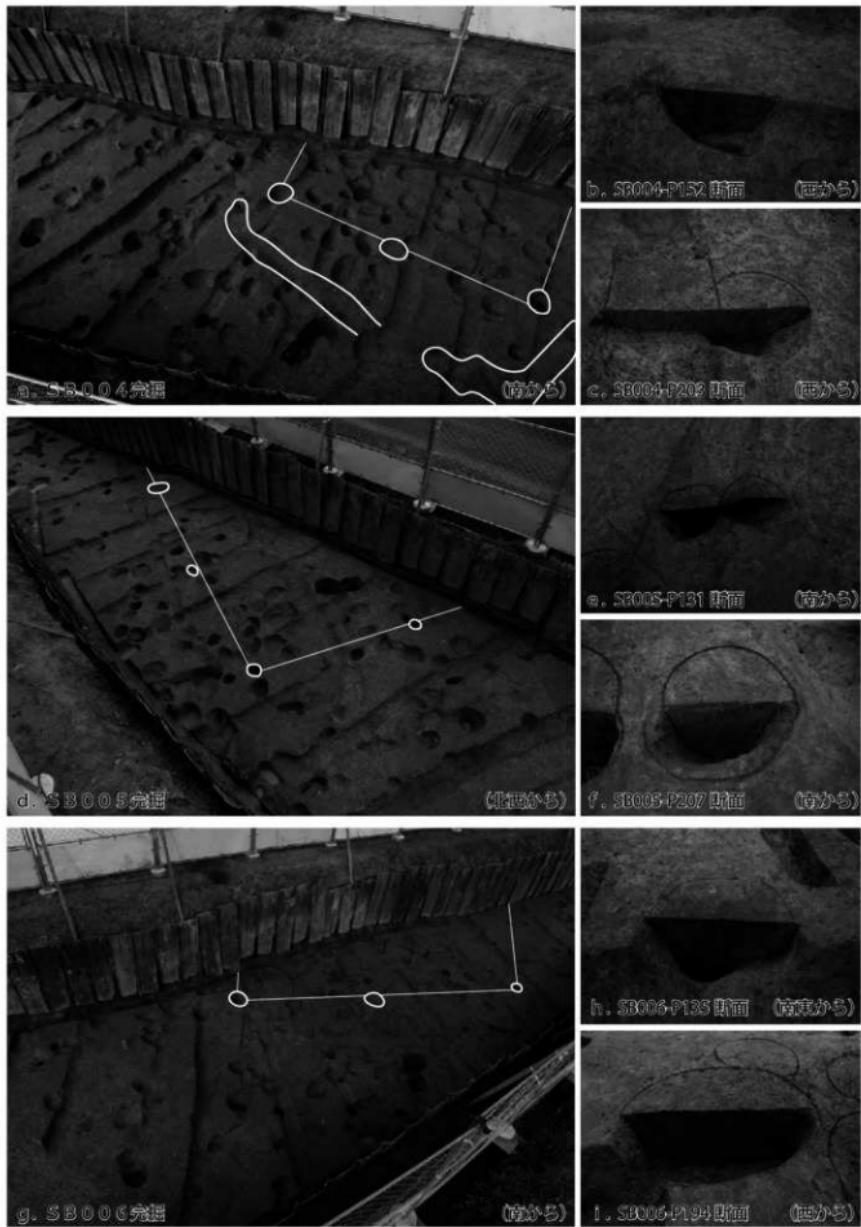
図版 20

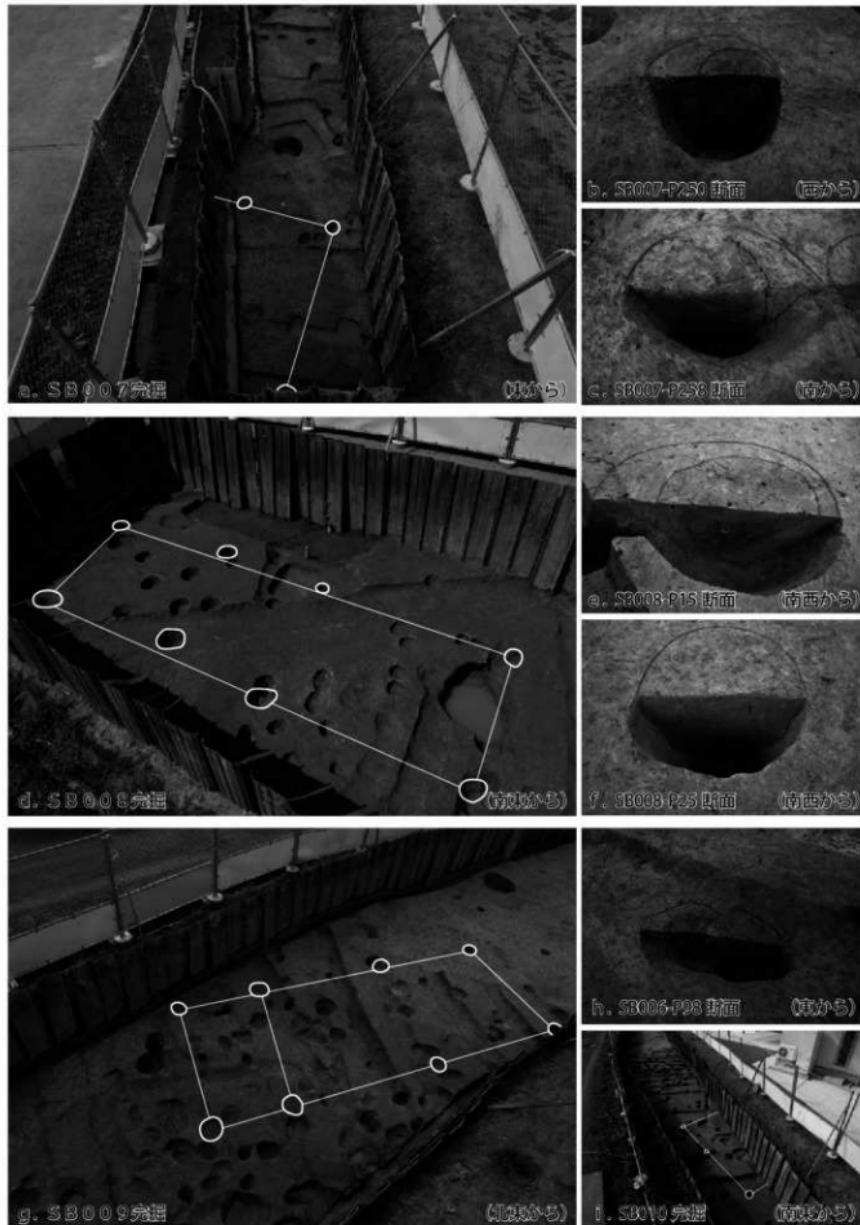
角田遺跡 5 遺構 2 掘立柱建物 (1)



角田遺跡 5 遺構 3 掘立柱建物 (2)

図版 21





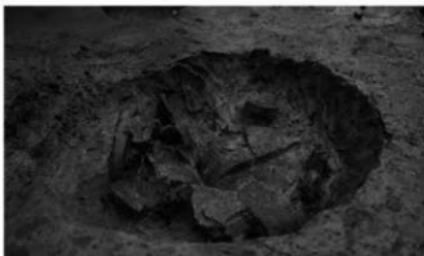
角田遺跡 5 遺構 5 土坑 (1)、ピット

図版 23



a. P 210断面

(南から)



b. P 210土坑壁出土状況

(南から)



c. P 210完層

(南から)



d. SK5A-A' 断面

(南東から)



e. SK5B-B' 断面

(南西から)



g. SK5C-E' 断面

(北西)

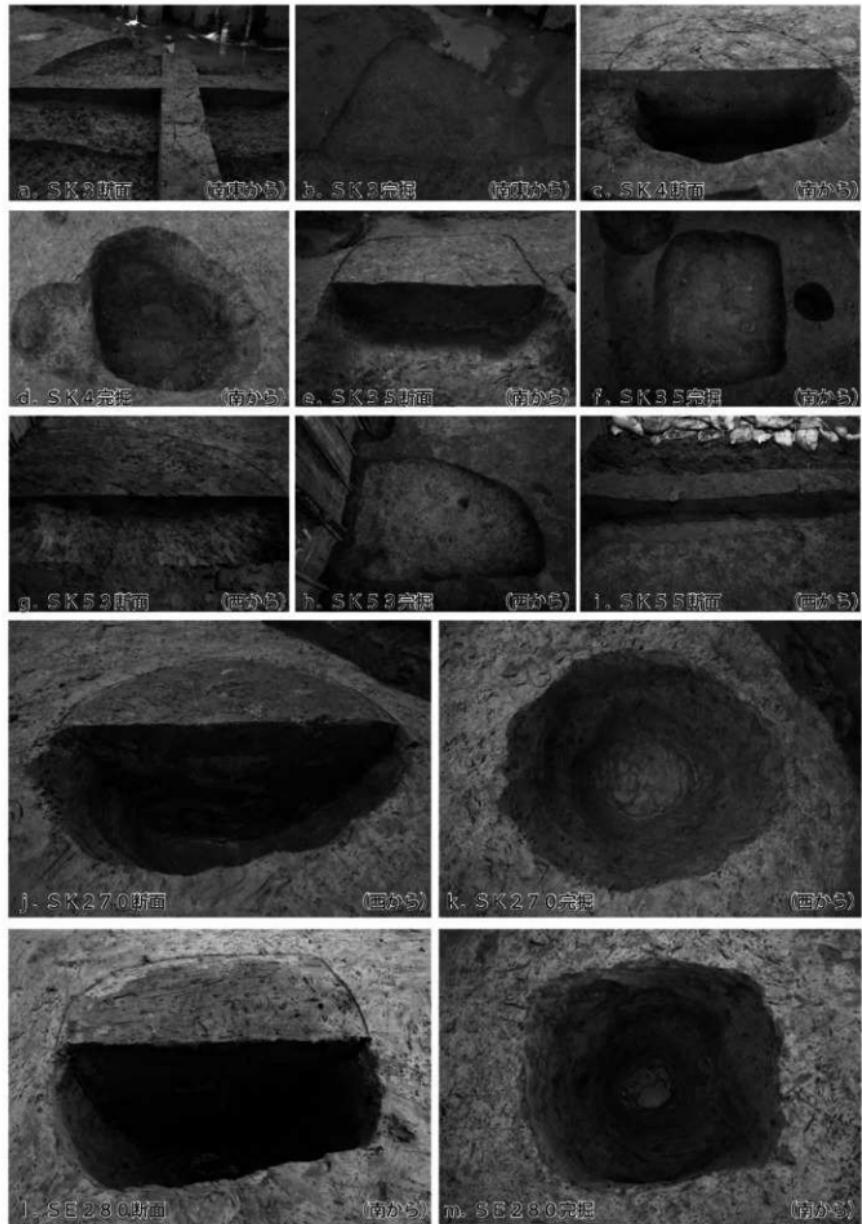


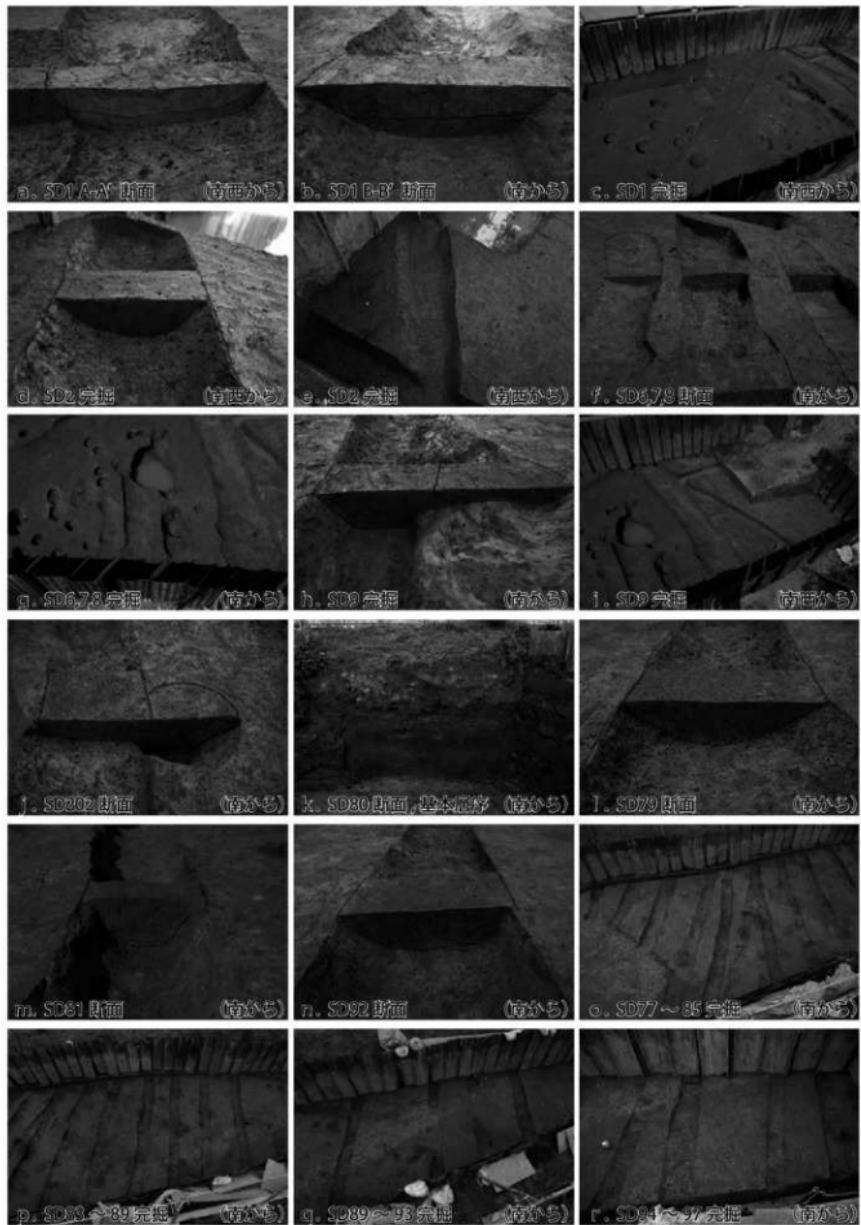
h. SK5E

(北西)

図版 24

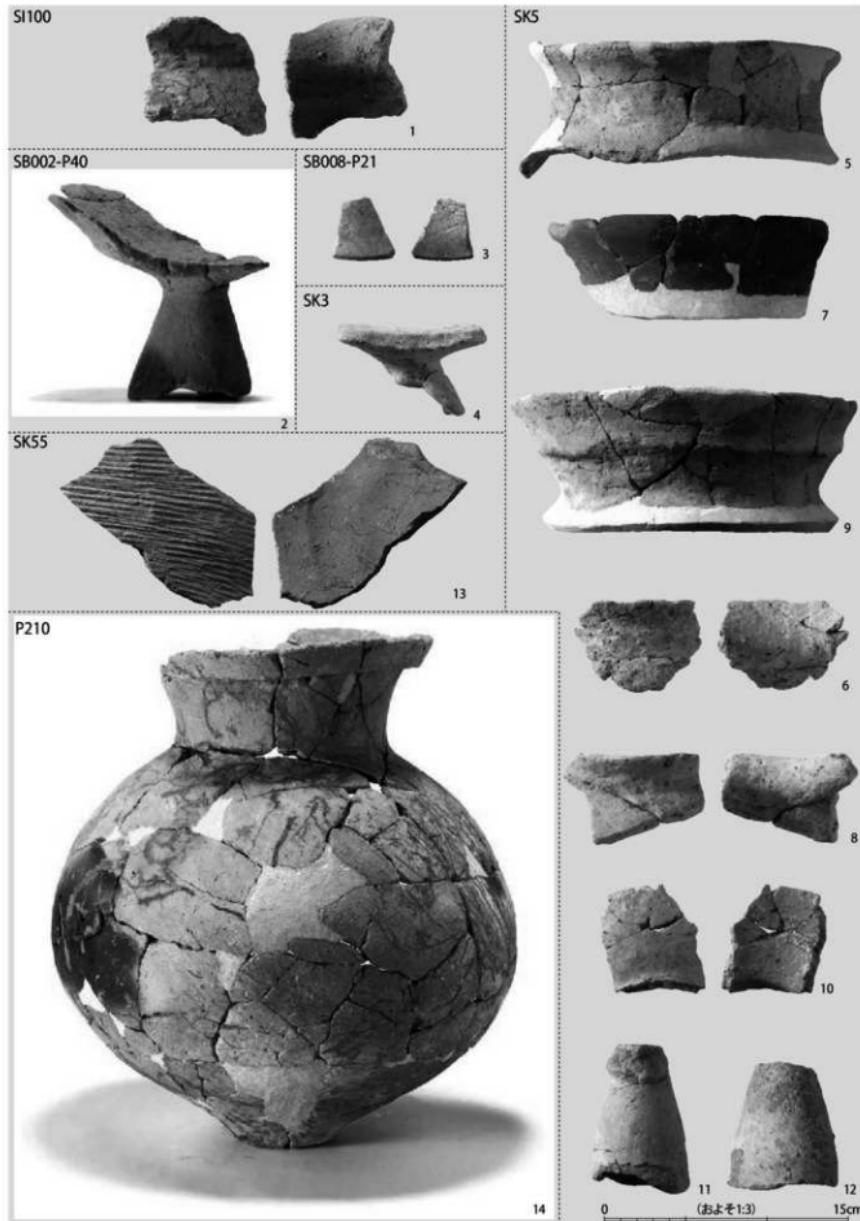
角田遺跡 5 遺構 6 土坑 (2)





図版 26

角田遺跡 5 出土遺物 1 土器 (1)



角田遺跡5 出土遺物2 土器（2）

図版27

遺物包含層（III層）



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



26



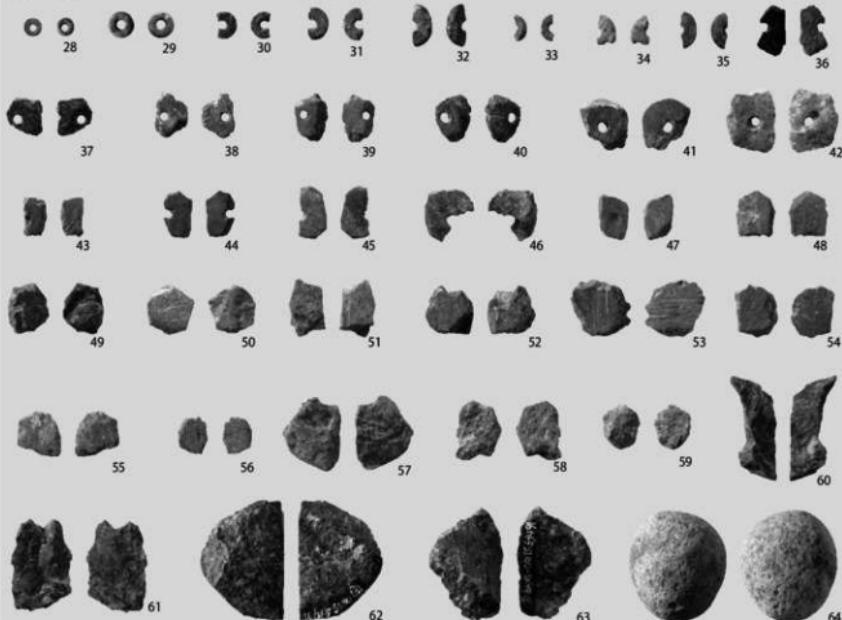
25



27

0 (およそ1:3) 15cm

SI100 (1)



遺物包含層（III層）



遺物包含層（II層）



0

(28~63 S=1:1)

5cm

0

(64~67 S=1:2)

10cm

0

(68 S=1:3)

15cm

報告書抄録

ふりがな	かどた3							
書名	角田3							
副書名	新潟県柏崎市 角田遺跡第4次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第90集							
編著者名	中島義人（柏崎市教育委員会） 白井雅明・高橋広太（藤村ヒューム管 本社営業部 柏崎営業所）							
編集機関	柏崎市教育委員会（担当：博物館）							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2017年（平成29）6月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
角田遺跡	新潟県柏崎市 大字劍字角田 地内	15205	37度 23分 22秒	138度 35分 57秒	20160727 ～ 20161027	270 m ²	記録保存	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
角田遺跡	集落跡	古墳時代 中期 古代	堅穴建物1棟・掘立柱建物10棟 ・土坑5基・井戸1基・溝11条・ ピット240基			土師器・須恵器・ 珠洲・石器・ 石製品・木製品	玉作関連資料を伴う 堅穴建物	
要約	<p>遺跡は、鰐石川と別山川が合流する自然堤防上に立地する。古墳時代中～後期・平安時代等の複合遺跡である。市道柏崎11-114線道路改良舗装工事によって消滅する区域について発掘調査を実施した。これまでの3次にわたり、主に中世の集落跡が見つかっている。</p> <p>27年度の調査区では、主な遺構として堅穴建物、掘立柱建物や土坑、井戸を検出した。出土遺物の時期から、古墳時代中期（5世紀）の所産が中心なことが明らかとなった。また10世紀、12世紀以降の延べ3時期の活動痕跡が認められた。堅穴建物は工作ピットと考えられる土坑が伴い、柏崎市域で初例となる玉作関連の建物が確認できた。遺構覆土からは滑石製の白玉未成品が多く出土し、製作工程の復元ができた。</p>							

※ 緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第90集

角田3

—新潟県柏崎市 角田遺跡第4次発掘調査報告書—

平成29年6月16日 印刷

平成29年6月30日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号

印刷 株式会社 小田

〒945-1352 新潟県柏崎市安田4153-1